



第 95 号

公益財団法人 黒田奨学会

巻 頭 言

巡り巡って今がある

大分大学福祉健康科学部 教授
徳 丸 治



皆様、初めまして。大分大学の徳丸と申します。

この度、伝統ある黒田奨学会の瑞藤会会報の巻頭言を執筆する機会を頂きました。黒田家第十六代当主長高公と常務理事岡本順子先生に、篤く感謝申し上げます。

防衛医科大学校へ

私は、郷里の公立高校を卒業後、1浪して防衛医科大学校（防医大）に入校しました。防医大は、自衛隊における医師（医官）を養成するために防衛省が設置している大学校です。現役のほぼ全ての医官は、防医大の卒業生です。

昭和59年に入校した同期生の中には、国公立大学医学部を不合格となって入校してきた者が少なからずおり、私もそのうちの一人でした。当時はまだ共通一次試験の時代で、国公立大学の二次試験の受験機会は年に一度しかありませんでした。そのため、私大医学部への進学が不可能である受験生にとっては、防医大が唯一受験可能な併願校でした。

防医大は防衛省（当時は防衛庁）の設置する「大学校」であり、「大学」ではありません。学生は特別職国家公務員であり、「入学式」ではなく「入校式」が行われ、「学生」という官職として採用されました。私は学士ではありません（私の2期下の期からは学位授与機構より学士が授与されています）。全寮制で、学生には制服が支給されます。授業への出席は勤務であり、学生手当が支給されました（本会の奨学金と同程度です）。

そのような背景があって、同期生の間では「大学であること・大学生らしくあること」に対する強いこだわりがあったように思います。特に、医学部の使命として初年次から繰り返し強調されていたのが、「診療、教育、研究」の3本の柱です。他の学部でしたら、「社会貢献、教育、研究」に置き換えることができるでしょうか。この3本の柱は、大学に籍を置くものとして、何時如何なる場合でも、一つも欠いてはならないと叩き込まれました。

卒業後も募る不安と不満

卒業後に医師国家試験の受験資格が与えられることは一般大（この表現も防医大特有のものです）と同じで、合格すると医師免許が与えられます。ただ一つ違っていたのは、我々は国家試験が終わると直ちに幹部候補生学校に入校して、6月の頭まで初級幹部自衛官としての教育訓練を受けなければならないことでした。当時は国家試験の合否結果発表が5月末でしたので、一般大の卒業生は我々よりも少し早く研修医生活を始めていました。このことに私たちは、少なからず焦りを感じていました。

他学より少し遅れて初任実務研修（初期研修）が始まることに加えて、防医大では当時としては珍しいローテート研修が行われていました。現在の研修制度ではローテート研修が当たり前ですが、その頃はほとんどの大学では卒業直ちに医局に入局して専門医を目指す、所謂ストレート研修が行われていました。自衛隊では、部隊や艦艇の医務室であらゆる傷病に対する初期対応ができるスキルを備えた医官が求められます。そのために「総合臨床医」の育成を謳って、内科を6ヶ月、外科を3ヶ月、麻酔科または救急を3ヶ月、内科・外科以外から選択した4つの診療科を6ヶ月研修し、将来専攻しようとする診療科の研修は6ヶ月間しか受けられませんでした。研修医を終えた時、同じ年に卒業した全国のライバルは既に専門科目のキャリアが2年あるのに対し、自分たちは半年しか研修できていない、しかも研修医が終わったら全国の部隊に配属され、専門医としてのトレーニングは遅れるばかりだと、不安は一層募りました。



防衛医科大学卒業前日に正門前で



築城基地勤務時
F-15体験搭乗

外に出て気付いたこと

2年間の初任実務研修を終えて、私は、福岡県にある航空自衛隊築城基地の衛生隊に医官として着任しました。F-15戦闘機とF-1戦闘機を運用する航空団に、医官は私一人で、大学病院以外での臨床経験が無い（即ちcommon diseasesを診た経験が無い）医師にとって、極めてchallengingな職場でした。加えて、パイロット特有の健康管理（航空身体検査など）など、これまでに全く教育訓練を受けていない職務も赴任と同時に待たなして始まりました。

一方、週5日の平日のうち、基地の衛生隊に出勤するのは3日だけで、残り2日は「通修」と称する部外研修が認められていました。私は、通修先として北九州市の産業医科大学を選択しました。この時は東九州自動車道はまだ一部が着工されたばかりで、築城基地から直方を経由して折尾にある産業医大まで片道2時間かけて通いました。春に遠賀川の河川敷が一面菜の花で覆われて黄色に染まっていたことを記憶しています。

私は自分の専門として小児科を希望していましたので、教授や助教授の外来の陪席や処置を中心に研修しました。教授回診や医局カンファレンスにも毎週出席しました。初めての臨床研究と国際学会での発表の機会も与えて頂きました。

産業医大小児科はストレート研修でしたので、同じ卒業年次であってもキャリアに1年半のギャップがあると思っていました。しかし、いざ通い始めてみると、その差を意識することはありませんでした。小児科領域の症例経験数だけを見ると、半年間と2年間の研修とで大きな差があったことは確かです。

しかし、私は内科や外科、麻酔科、皮膚科、精神科など、ストレート研修では担当することができない症例を多く経験していることに気がきました。

もう一つ驚きだったのは、産業医大の卒業生が、私が想像する以上に自衛隊医官の仕事に対して興味をもって私に接してくれたことです。我々が悲観し不満に思っていた防衛医大のカリキュラムや特性は、必ずしもデメリットばかりではなく、他学の卒業生にとっては魅力的であるものが少なくないことを、初めて知りました。

米軍留学

卒後4年目に、アメリカ空軍の航空医官課程に留学することになりました。語学研修を合わせても8ヶ月間という短い期間ではありましたが、テキサス州のサンアントニオという、楽しく刺激的な街で初めての海外生活を送りました。滞在中は米軍のIDカードを与えられ、基地内の家族同伴者向けの宿舎に滞在しました。帯同した妻も米軍施設での生活を満喫し、基地のOfficers' Wives Club（将校婦人会）に誘われて出席したこともあります。

この課程の間に様々な基地を訪れて、実に多様な米空軍軍医の業務を知りました。第一線の部隊の軍医は飛行隊に常駐し、パイロットに密着して健康を管理していました。世界中を網羅する患者空輸のネットワークによって、地球上のどこで傷病兵が発生しても直ちに安全に空輸する体制を整えていました。

NASAの宇宙飛行士の中には現役の空軍パイロットもいます。彼らの健康管理も、空軍軍医の業務の一つです。軍の病院の中には、世界トップレベルの診療実績を持つ部門も少なくありません。私は、防医大でのローテーション研修を不服に思い、週3日の部隊勤務は仮の姿で残り2日の産業医大での通修こそ真の姿だと臍曲がりの考えを持っておりました。自分の視野の偏狭さを思い知り、防医大の卒業生だからこそ向き合える世界が広くあることを知りました。

滞米中に、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が発生しました。災害派遣の自衛隊の車両が神戸に向かう大渋滞に巻き込まれてしまい、被災地入りが大幅に遅れたとの報道に、ある国の軍医は「なぜ救難活動に向かう軍用車が渋滞に巻き込まれるのか？」と驚いていました。サリン事件では、「サリンにしては死者が少な過ぎる」との疑問を述べていました。当時の私は、自衛隊医官として身につけておくべき国際的な常識・見識に乏しく、これらの疑問に答えることができませんでした。当事者意識に欠けた医官であることを大いに恥ずかしく感じました。

帰国後、航空医学を専攻するため、防医大の生理学講座で後期研修を行いました。2年間の後期研修の後、航空自衛隊における航空医学の専門部隊である航空医学実験隊に配属され、空間識失調に関する教育訓練と研究に従事しました（私の学位論文はこの間に作成しました）。卒後9年目に、航空自衛隊から宇宙開発事業団に転じ、宇宙飛行士の健康管理に従事しました。3年半後、東京女子医科大学生理学教室の助手になりました。2年半後、大分大学医学部に生理学講座の助手として着任しました。

大分大学に異動して間もない頃、キャリア開発の授業を1コマ担当したことがあります。その講義の中で、私のこの時期の転職と引越しの繰り返しについて「数年先のことは分からないから面白い」という趣旨で学生に話しましたが、今この原稿を書きながら少し違うことを考えています。そのことを少しお話ししたいと思います。

巡り巡って自衛隊

防医大は全寮制です。公務員ですのでアルバイトは禁止です。一般大の学生のように下宿したい、アルバイトもしたいと憧れていました（実際にアルバイトをして、処分された同期生もいます）。しかし、かつて憧れた「一般大の医学生」を大分大に赴任して観察してみると、アルバイトに追われる学生、一人寂しく下宿に帰ってコンビニ弁当を食べている学生の多いことに気がきました。防医大で我々は、部活や勉学を好きなだけ行っていました。それ以外は何もしなくても、意識すらしなくても、衣食住は全て用意されていました。

防医大の卒業生は9年間自衛隊に勤める義務があります。入校した時から、この義務が絶対悪のように感じられて、同期生の多くは何とか逃れることはできないかと一生懸命考えていました。しかし、その義務年限の中に2年間の初任実務研修と2年間の専門研修が含まれています。全員ではありませんが、防医大の研究科に入校することも可能です。この場合、部隊または自衛隊病院での勤務は2、3年のみで、それ以外の期間は防衛医大で診療に従事しており、むしろ恵まれていると言えるのかも知れません。

また、防医大卒業生の特徴の一つに米国への臨床留学志向があります。臨床留学するには米国の医師国家試験と英語試験に合格する必要があります。この試験の合格者は毎年全国で50名程度とされていますが、私の同期生は実に10名程がこの資格を取得しました（ちなみに筆者は受験すらしていません）。ありがたいことに、資格を取得した同期生の何人かは防衛省から留学が認められて米国の医師免許を取得しました。その中には、後に米国で医学部の主任教授となった者もいます。

臨床留学以外にも、防医大研究科に入校した同窓生の多くは留学を経験しています。その間も自衛官としての身分は保障され給与も支払われます。旧帝大等を除けば、新設医大の中で留学機会の多さも特筆すべき防医大のメリットと言えるのかも知れません。

確かに、他学と比較してデメリットが多くあることは事実ですが、同時に我々にしか与えられないメリットもあることに、学生時代や卒後間もない時期には誰も気が付きませんでした。それ故に、私を含めて多くの同期生が自衛隊医官にしか経験できない機会を見過ごしてしまったのではないかと、今、残念に思っています。

現在、私は予備自衛官です。地元の駐屯地の医務室の嘱託医も務めています。巡り巡って自衛隊に戻っていることに大いに驚いていますが、納得もし、誇りに思っています。

巡り巡って産業医

宇宙開発事業団在職時にはテキサス州ヒューストンにて、NASAジョンソン宇宙センターとテキサス大学の合同プログラムを履修し、宇宙医学の実務訓練を受けました。この間に、毛利衛飛行士と若田光一飛行士のそれぞれ2回目の宇宙フライトミッションがあり、私は副担当医師（デピュティ クルーサージャン）としてこのミッションをサポートしました。フロリダ州のケネディ宇宙センターからのスペースシャトル打ち上げの光景は忘れられません。

この間、テキサス大学で公衆衛生学の修士課程に在籍しました。宇宙飛行士の健康管理は、宇宙空間という異常な環境で仕事に従事する従業員（宇宙飛行士）の健康管理を行う産業医活動です。

この産業医活動のモデルは、軍隊や南極越冬隊であると言われます。宇宙船や宇宙ステーション内の極めて限定された医療資源を用いて行わなければならないからです。こう考えることで、自衛隊でも宇宙開発事業団でも、私は産業医として勤務してきたことに気づきました。

その後、日本医師会認定産業医を取得し、現在は県内の複数の事業所の産業医を務めています。また、縁あって大分労働局の労働衛生指導医も委嘱されています。産業医としての業務は、自衛隊の医務室

の業務とほぼ変わりません。事業所毎に業務が異なり、従業員の抱える健康問題にも特徴がありますが、月に一度の各事業所での産業医活動は、どこも巡視が楽しみであり、非常勤とはいえ積極的に関与しています。



ヒューストン在勤時 オープンハウスで
(前列右が妻と私、後列左が若田光一氏、
毛利衛氏の両飛行士)

巡り巡って航空宇宙医学

宇宙開発事業団には3年半在籍しましたが、組織が航空自衛隊よりも窮屈に感じたため、さっさと辞めてしまいました。また、職務内容が当初期待していた研究面ではなく、運用面ばかりであったことも理由の一つでした。

しかし、今から思うと、医師（しかも同門）の論理で業務を遂行することができた自衛隊衛生部門とは異なり、多職種の専門家から構成されるチームで自分に都合の良い話だけが通用するはずはありません。また、宇宙開発という未知の分野に切り込んでいくのですから、運用のみに従事しているようでも、私は最初から壮大な研究プロジェクトの一員であったのです。辞職を上司に申し出て間もなく、皮肉にも或る研究プロジェクトに誘われましたが、後の祭りでした。

自衛隊も宇宙開発事業団も辞めてしまい、私は航空宇宙医学から手を引いたつもりでした。数年間は、関連の学会にも全く顔を出しませんでした。ところが、大分大の上司から生理学の1コマとして宇宙生理学を講義するように命じられました。医学生の中から航空や宇宙に興味ある者が毎年数人現れて、筑波宇宙センターの見学を手配するようになりました。そして今から2年前には、どういう訳か関連学会の役員を命ぜられ、図らずも航空宇宙医学の世界に戻ってきてしまいました。さらに驚いたことに、昨年、現在住んでいる大分県が「宇宙港大分」構想を立ち上げるに至りました。大分空港を宇宙港として整備し、民間宇宙ステーションに滞在した宇宙渡航者の帰還地として名乗りを上げたのです (<https://www.pref.oita.jp/soshiki/10850/oita-airport-vision.html>)。まさか自分の住む地域に宇宙からヒトが帰還することになるなど、夢にも思っていませんでした。

結局のところ、航空宇宙医学との縁は切れませんでした。そうなることが分かっていたならば、宇宙開発事業団を早計に辞めなければよかったと思うこともあります。その一方で、辞めたからと言って宇宙開発事業団での経験が無駄になった訳では決してありません。幸いなことに、この3年半の勤務経験は、その後の仕事に大きく影響しているのだと、今も強く確信しています。

巡り巡って今

現在私の住んでいる大分県では、毎年のように土砂災害が発生しています。また、南海トラフ地震では県南部を中心に最大で13.5mの津波が10分程度で到達するとの被害も想定されています。そこで大分大学は、5年前から防災・減災に関する取り組みを県や市町村と協力して推進しています

(<https://www.cerd.oita-u.ac.jp>)。その一環として、2年前から私は、自然災害の被災者の健康危機に関する学部横断・領域横断のプロジェクトの代表を務めています (<https://hies.cmo.oita-u.ac.jp>)。

学内で「生理学」を専門として名乗っている者が、なぜこのプロジェクトを率いるのか、学内で訝しがられることがあります。しかし私は、これまでの経歴から公衆衛生学・予防医学も自分の守備範囲であると自負しています。加えて自衛隊や宇宙開発事業団での多職種連携の経験もあります(当時は意識できていませんでしたが)。それ故に、私自身はこの領域横断の仕事に何の違和感も感じていません。取り組みを開始してから2年が経過し、学術的な成果も出始めてきました。もしも防医大に入校しなかったら、このような課題に取り組む機会などなかったでしょう。

終わりに

先日、ある同期生が自分たちのことを、「変わった学校に、妙にプライドが高い者が入ってきて、一風変わったキャリアパスを歩んだ」と表現していました。我々は、防医大という他とは異なる特性をもつ学校に、他学との違い故に抱いたコンプレックスとそれに対する防衛規制として過剰とも言える高いプライドをもって進学しました。しかし、時が経って振り返ってみると、その学校の特性故に与えられたユニークな機会と、高過ぎるプライドを昇華させて得られた医師として、研究者として、そして社会人としての矜持を手し、それぞれのキャリアパスを歩んでいるのだと、捉えることができました。

本稿の執筆の機会を与えてくださった岡本順子先生は、防医大生理学第二講座の助教授として、研究室で我々学生の知的好奇心を絶えず刺激し、自宅に招いて手料理で底無しの食欲を満たしてくださいました。日々の何気ない雑談の中で、社会に貢献するとはどういうことか絶えず議論して、怠惰に流れ易い我々を戒めてくださいました。そのような薫陶のおかげで、本稿に記した境地に至っていることは間違いありません。

あらゆる意味を込めて、深く感謝申し上げます。筆を置くこととします。ありがとうございました。



博多での教授就任祝いに防衛医大同期生が集合
(前列左より2番目が私と妻、その右隣が岡本先生)

徳丸治氏 略歴

平成 2年 3月 防衛医科大学卒業、航空自衛隊入隊
平成11年 3月 航空自衛隊退職、宇宙開発事業団宇宙医学研究開発室医長(14年退職)
平成11年 8月 テキサス大学ガルベトン校大学院医学研究科修士課程入学(13年修了)
平成14年10月 東京女子医科大学医学部第一生理学教室助手(17年退職)
平成17年 4月 大分大学医学部生理学第一講座助手(講師を経て18年助教授)
平成28年 4月 大分大学福祉健康科学部教授(現在に至る)

目 次

巻頭言 巡り巡って今がある

大分大学福祉健康科学部 教授 徳丸 治

特別掲載

社会貢献を今一度考えてみませんか

公益財団法人黒田奨学会理事長 伊達 健太郎 …… 1

トピックス

黒田裕大様 令和5年博多山笠で台上がり …… 3

「国際法模擬裁判大会」にチームで参加した

東京大学法学部2年の小淵朝陽君が快挙！ …… 4

海外留学&研修報告

ミラノ留学の報告

京都大学文学研究科修士2回生 小河 義典 …… 5

ボストンへの短期留学

九州大学工学部I群2年 吉田 遼太郎 …… 6

奨学生の近況報告

● 関東地区在住奨学生 …… 8

● 九州地区在住奨学生 …… 10

行事報告

令和5年度 九州地区前期第1回研修会 …… 12

令和5年度 九州地区前期第2回研修会 …… 14

令和5年度 関西地区研修会 …… 16

令和5年度 九州地区後期第1回研修会 …… 19

令和5年度 九州地区後期第2回研修会 …… 21

公益財団法人黒田奨学会に対する寄付継続のお願い …… 23

令和5年度奨学会基金への寄贈者 …… 23

編集後記 …… 24

黒田奨学会研修会・発表抄録集 …… 25

総会のご案内 …… 31

社会貢献を今一度考えてみませんか

公益財団法人黒田奨学会

理事長 伊達 健太郎

1. なぜ社会貢献を目指すのでしょうか。社会に貢献するのは当たり前のことで、説教ヅラで講釈されるのは不愉快だと思われる方がおられるのは承知しております。

ボランティア活動をしておられる方は多いと思いますが、文字通り『ボランティア』で、人に言われ、また強制されて活動するのではないことに価値があるのです。ボランティア活動は社会貢献の一つで、本来黙って貢献すればよいというのはある意味もっともだと思います。でも社会貢献とは何なのか、どのような活動が社会に貢献することになるのか、今一度考えて見るのも意味あることではないでしょうか。

2. 当奨学会の理事であった金子堅太郎子爵は、昭和8年の東京瑞藤会において、奨学生を前に「諸君は社会で働いてもらいたい」と訓示しました。「(明治)維新事業では筑前は五十二萬石の大藩でありながら、筑前人は少しも力を入れていない」に続けてのスピーチです。さらに「筑前人は内向きで福岡では威張っているが、東京に出てきて威張れ」と激励しております。金子子爵は、社会貢献の舞台は福岡ではなく社会全体だ、と言いたかったのだらうと思います。

金子子爵は日露戦争後の講和交渉において、ハーバード大学同窓のルーズベルト大統領を動かして、わが国、ひいては世界の和平秩序を構築することに貢献しました。

金子子爵が今生きていたならば、“奨学生は世界で人類の和平のため貢献するような仕事をしろ”と言ったのではないのでしょうか。

3. 社会貢献は、個人だけでなく企業や組織の活動指針でもあります。たとえばCSR（企業の社会的責任）やSDGs（持続可能な開発のための17の国際目標）という指針があります。従来、企業は株主の利益追求を目的とする組織で、会社の利益を最大にするために活動すると考えられてきましたが、現在では株主以外の取引先や従業員にも配慮すべきである、さらに社会全体の利益、たとえば環境にも配慮する責任がある、という考え方が一般的になっております。奨学生の中には企業や組織の中で活躍しようという人もおられるでしょう。皆さんは将来社会において指導者的立場で活躍することが期待されているのですから、理解しておいて頂きたいものです。

4. CSRはCorporate Social Responsibilityの略です。企業経営の際に、自社の利益追求だけでなく、人権・環境・雇用・消費者保護・企業統治などに配慮する責任があるという原則です。

CSRは、法令を遵守した経営を行うという「法的責任」と賃金や代金をきちんと支払い、また税金納付や利益配当をするという「経済的責任」が基本です。現代の企業は、さらに「倫理的責任」が要求されます。たとえば従業員や取引先に対して人権に配慮すること、例えば性差別、人種差別、労働者搾取を行わないとか、また環境に配慮すること、CO₂排出抑制、水産資源を乱獲しない等がその例です。

本来、企業は株主、従業員や取引先に対する責任を果たせばよいと考えられてきたのですが、企業活動はその拡大に従って社会全体へ影響を与えるようになり、たとえば環境保護にも責任があると考えられるようになってきたのです。

企業活動は国境を越えて世界中に広がります。ではここで問題です。A社は貧しいB国から工業原料を輸入していたところ、児童労働で製造されていることがわかったのをこれを止め、少々高くとも児童労働を使わないC国に輸入先を切り替えるべきか否か。皆さんが経営者だったらどうしますか。

明確に結論を出せない問題は多くあります。考えてみて下さい。

5. CRSに関してSRIという考えがあります。Socially Responsible Investmentの略で、社会的責任投資の訳です。100年以上前のことですが、アメリカの教会が資産運用をする際、キリストの教えに合わない事業には投資しない、と決めたことに始まります。たとえば武器、ギャンブル、アルコールには投資しないという方針です。わが国においては原発事故をきっかけとして原発を保有する電力会社の株式を持たないという株主運動がその走りと言われています。

2006年に国連事務総長が、金融機関に向けて責任投資ガイドラインを発表し、環境(Environment)、社会(Social)、統治(Governance)に配慮した企業を選んで投資すべきだという、ESG投資の呼びかけを行いました。その結果、たとえば脱炭素のEVや再生エネルギー事業に対して投資する方が、ガソリン自動車や火力発電事業に投資するより、高い利益が得られるのではないかという投資家が出てきました。

世界最大の機関投資家と言われる年金積立金管理運用独立行政法人(通称「くじら」と言われています)は、国連責任投資原則に署名して、ESGの要素を考慮した投資を進める方針をとっています。その市場における影響力から世界中の投資家はその動向から目を離せないということです。企業が倫理的責任を果たすことで、収益上プラスになるという考えは実に興味深いことです。

6. SDGsはSustainability Development Goalsの略です。2015年の国連サミットで採択された国際社会が取り組むべき目標です。17の目標に数値目標を合わせて決議されました。1段目のゴールは「貧困をなくそう」等の基本的人権や生活水準に関する内容、2段目のゴール「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」等の経済的・社会的豊かさに関する内容、3段目のゴールは「気候変動に具体的な対策を」と「平和と公正をすべての人に」等の地球環境や、平和とパートナーシップに関する取り組みです。対象はまず国連加盟国ですが、企業や各種団体、それに個人もその取り組みを要請されています。ところでSDGsはビジネスの指針として信頼できるだけでなく、経営やマーケティングの観点から無視できないと受け止められていることは興味深いところです。ビジネスパーソンが、17に色分けされたSDGsバッジを着けているのをよく見かけますね。今後SDGsが投資家や消費者にも広がることで、SDGsのゴールとなるマーケットが拡大していくことを期待してのことでしょうか。環境汚染や人権問題が存在する社会は継続が脅かされます。企業が社会で継続していくためにはその社会自体が発展しなければなりません。SDGsは企業存続のための指針でもあるのです。

7. ソーシャルビジネスという事業があります。SRIの応用編です。ビジネスを通して社会課題を解決することを「ソーシャルビジネス」といい、バングラディッシュのムハマド・ユヌス博士が提唱しました。

社会貢献というとボランティアで無償の貢献を思い浮かべる人が多いのではないかと思います。それだけでは継続できません。持続して社会貢献するために、社会貢献する事業で利益をあげながら、その利益を使って事業を継続し、さらに拡大していくことができるのがソーシャルビジネスです。ユヌス博士は、1983年に農村部の貧困層の自立を支援するために、無担保奨学融資を行うグラミン銀行を創設し、バングラディッシュの貧困撲滅と平和構築に貢献した功績がたたえられ、2006年にノーベル平和賞を受賞しました。その後50社以上のグラミン関連企業を運営して、国連や多国籍企業、大学とも連携して、世界中にソーシャルビジネスを広げております。

九州大学の岡田昌治特任教授がユヌス・ジャパンを設立して、ユヌス博士の片腕として活動しております。皆さんの中でも、アイデアのある人はソーシャルビジネスを起業してみたいかでしょうか。案外ハードルは高くないかもしれません。

8. 社会貢献には多様な取り組み方があります。

特に個人の取り組みについては、今取り組むこと、また将来取り組みたいことについて、人それぞれ考えがあるでしょう。ユヌス・ソーシャル・ビジネスの目的として、貧困、教育、環境等の社会問題を解決すること、に始まる7原則が掲げられておりますが、その最後に「楽しみながら」と掲げられているのが印象的です。

社会貢献は難しく考えるのではなく、楽しみながらから始めてみたいかでしょうか。皆さんのご健闘をお祈りいたします。

トピックス

●黒田裕大様 令和5年博多山笠で台上がり

博多の三大祭りの一つで、勇壮かつ熱狂的な夏祭りの博多祇園山笠、毎年7月1日より開かれますが、この13日目（令和5年度は7月13日）には「集団山みせ」として昇き山が博多の街、明治通りの呉服町交差点から天神（福岡市役所）間約1.3kmを往復して駆け抜けます。そして、この往路は知名士が「台上がり」を務め、棒さばき役の各流総務ともども昇き手を叱咤激励する習わしになっています。

令和5年7月13日に行われたこの集団山みせにおいて、黒田家第17代の黒田裕大様が四番山笠中洲流れの昇き山で「台上がり」をされ、見事にその大役を務められました。

前日より黒田長高・由佳子様ご夫妻と黒田裕大・絢子ご夫妻が東京から、また、裕大様のご両親様が山形からと、来福されましたが、集団山みせの終了後に皆様を歓迎する会として黒田奨学会が行った食事会では、裕大様は興奮冷めやらぬ表情で、締め込み姿（ふんどし姿）の感想を含め、貴重な初体験談を話されていました。

ちなみに、第16代黒田家御当主の長高様は2014年の集団山みせで「台上がり」をされています。





黒田奨学会主催の歓迎会

●「国際法模擬裁判大会」にチームで参加した 東京大学法学部2年の小淵朝陽君が快挙！

7月に東京で行われた「国際法模擬裁判大会」に東大チームとして参加した東京大学法学部2年の小淵朝陽君チームが見事に準優勝を獲得しました。7月に彼から送られてきた近況報告の内容を掲載し、その快挙を紹介します。

令和5年7月1日(土)から2日(日)の日程で、代々木公園隣の国立オリンピック記念青少年総合センターにて JAPAN Cup 2023 という国際法模擬裁判大会が開催されまして、私も現代国際法研究会のチームで東京大学として出場しました。チームは一つ6人で構成されており、原告被告それぞれ代理人が二人で弁論者4人、そして原告被告にそれぞれ補佐人が一人つくというものになっております。私は原告補佐人で、法廷内ではずっと二人の代理人に付箋を回す…ということに終始していました。今年度のうちのチームは弁論者がみな今年春に入会したばかりの1年生のみで構成されており、フレッシュさで勝負できた反面、若干成績面では不安が残る布陣ではありました。しかし、結局総合成績としては準優勝であり、弁論者全員が弁論者賞を受賞するという快挙を遂げました。今回のテーマはICJ（国際司法裁判所）の時間的管轄権・国家の裁判権免除・反訴の受理可能性・国家の強制措置からの免除という手続法が多く難しいと感じるテーマでしたが、なんとか色々な人の手助けもあって準備に準備を重ね、それが成就したのではないかと考えております。満足できる結果とは言えませんが、これを刺激に次の模擬裁判大会でもいい成績が残せるよう励んでいければと考えております。

また、今私がなぜか代表を務めている現代国際法研究会の今学期の活動も、7/10(月)の私の国際経済法の勉強会で取り敢えず終了いたしました。（少し勉強会に関しては知識面でも準備不足においても進行面でもまだまだと思わされる形ではありましたが…。）新歓からここまでなんとか前期はサークルをつぶすことなくがんばってこれたという気持ちです。勿論これには副代表などの2年を中心にたくさんの方の協力があったからこそでありました。来年の2月まで（実質は今年いっぱいくらいまで）代表業務は続きますが、なんとか耐えていきたい（あわよくば発展させていきたい）と考えております。

ミラノ留学の報告

京都大学文学研究科 修士2回生
小河 義典



カステッラルクアートまでの道の途中で

2023年1月から8ヶ月間のミラノでの留学を終え、8月末に帰国いたしました。今回は私が研究するオペラ台本作家、ルイージ・イッリカ (Luigi Illica 1857-1919) の足跡を辿った旅についてご報告します。

ボッコーニ大学での聴講を終え、時間的に余裕を持てるようになった6月ごろ、イッリカの生まれ故郷であるカステッラルクアート (Castell' Arquato) というコムーネを訪れることにしました。コムーネというのはイタリアにおける自治体の最小単位であり、市や町のようなものですが、ここは人口5000人程度の、規模感としては町と言うより村といった場所で、中世のお城の雰囲気は今もなお残っており、ちょっとした観光地となっています。このコムーネにはイッリカ博物館なるものがあり、調べてみたところ、入館には予約が必須となっていたので、ある日曜日の朝、電話でどの日時であれば予約できるかを尋ねてみました。すると担当者から「今日ちょうど予約の枠があるから16時30分に観光課の窓口に来てくれ」とのこと。しっかり準備をして行くつもりが、思いがけずイッリカの故郷に行くことになり、旅は急遽始まることとなりました。



到着後すぐに食べたジェラート

カステッラルクアートまではミラノから電車でおよそ1時間、そこからバスに乗り継いで20分ほどで到着できるのですが、この日はあいにく日曜日。最寄り駅までは何事もなく到着したのですが、目的地までのバスが朝早い時間と夜遅い時間に2、3本ずつしか運行しておらず、すでに午前中のバスは終了していました。タクシーアプリを開いても近くで呼べる車は1台もなく、ヒッチハイクをしようにも駅のまわりとは思えないほど車通りがゼロ、途方に暮れそうでしたが、博物館の予約時間もあったので仕方なく歩くことにしました。しかし6月といってもイタリアは晴れ続きで、気温は25度を越えた真っ昼間、10分と経たずに歩き始めたことを後悔しましたが、熱い日差しを浴びながら、途中の村落に寄って休憩しながら、だらだらと歩き続けること3時間、ようやくカステッラルクアートに到着です。着いた頃にはもう時刻が16時、観光するつもりだったのも忘れ、とにかく暑さを逃れようとジェラート屋さんに行きました。間違いなくイタリアで食べたジェラートの中で1番美味しかったです。

さて、約束の16時30分に観光課の窓口に行くとそこには職員さんが1人だけ。電話で博物館の予約をした者だと伝えると笑顔で「それじゃあ行きましょう」と言い、そそくさと窓口を閉め始め、なんと博物館までのガイドが始まりました。予約の枠がどうこうと言われていたので、てっきり他にも入館者がいるかと思っておりましたが、予約したのは私だけで、そもそも予約制にしている理由は、



博物館の入場券

めったに博物館目的の観光客が来ないから、入館希望者が来る時だけ博物館を開けるためだったそうです。日本人はめったに来ないと言われました。いずれにせよ1人で博物館を独占して、イッリカの生い立ちなど留学に行く前は知らなかったことをたくさん知ることができたうえに、付き添ってくれた職員の方にピアチェンツァという町の図書館にイッリカに関する論文や文献が集められていること、7月に開催されるルイージ・イッリカ・フェスティバルのことを教えてもらうことができたので、非常に幸運でした。

その日は博物館の観覧を済ませた後にすぐ帰ることにし、観光課の方に最寄りの駅から歩いて来たと言うと笑われ、馴染みのタクシードライバーを紹介してもらいました。ここでも思いがけず、イッリカの生家がコロナ禍以前はホテルとして利用されており、オーナーの妻が日本人だという話を聞くことができました。研究している台本作家と日本とのつながりに驚きとうれしさを感じた瞬間でした。

翌月、教えてもらったフェスティバルにて、博物館とイッリカの生家周辺のガイドツアーに参加し、翌日に本番を控えていたオペラのリハーサルを見学することができました。またピアチェンツァの図書館では聞いていた通り、イッリカに関する論文やオペラ台本に関する文献を閲覧することができました。ほとんどの資料は館外への持ち出しが不可能だったため、その場で複写し（なんともイタリアらしく、尋ねると無料で複写させてもらえました）、一週間通い詰めでたくさんの文献資料を持ち帰ることができました。

さまざまな人との出会いや思いがけないことの連続ではありましたが、留学目的の1つであった研究資料の収集が達成できたのはとても喜ばしく思います。最後になりましたが、非常に充実した留学生活を送らせていただきました奨学会の皆さまに感謝を申し上げて、この報告を終えたいと思います。



フェスティバルのポスター



カステラルクアートの町



町の中心の広場



見学したリハーサルの様子

ボストンへの短期留学

九州大学工学部 I 群 2 年
吉田 遼太郎

私は、夏休み中にボストンへの短期留学プログラムに参加した。内容は、起業について実践を通してゼロから学ぶというものだ。このプログラムに申し込んだ際は起業や経営に対する興味があり、学ぶ意欲があったのだが、8月頭にコロナにかかったときに、すべてのやる気が嘘のように消え、何も

手につかない状態に陥った。そこで、いつそ何も考えずにやりたいことをして楽しもうという気持ちになり、その状態でプログラムに参加した。そのため、プログラムが本来意図していた学びとは少し異なる方向になってしまったが、私としてはとても有意義な経験となった。

まず、純粋な気持ちで行動することができた。普段気にも留めず忘れるようなことにも目を向け、肌でその空気を感じることで高い感受性を保ったまま見知らぬ世界を味わえたのだ。今までは、目標を定めてスキルや知識を学ぼうとしていた。しかし、今回のように具体的な目標を定めず、その瞬間を全力で味わおうとすることで、自分の中に蓄積され、学びとして還元されるという体験を通じて、新たな学び方を知れた。そして、研修参加者の自分とは全くタイプの異なる人間と深くかかわることができたことも大きかった。彼は、とても社交的な人間で、言語の壁をものともせず現地の人と仲良くなり、連絡先を交換する手際の良さには驚かされた。また、彼は日本でも多くの人々とともにビジネスを行っており、その経験談はとても興味深かった。これらの経験から学んだことをまとめると、以下ようになる。

一つ目は、人を巻き込むことの力の大きさだ。以前から、個人の能力差のみで物事をなそうとするには限界があると思ってはいたが、実際にその力で結果をだした人を見て実感することができた。しかし、同時に、この研修を通して自分がいかに人とのコミュニケーションに向いていないかも実感した。そのため、何かしら自分に合った方法で人を巻き込むことを身に付けていきたい。二つ目は、アメリカと日本の文化の違いだ。ありきたりな言葉だが、その違いは様々な場面で実感した。まず、他人に対して寛容である。私たちが現地の方にインタビューをしていた時、多くの人は好意的な対応で、従業員の方も言葉がわからないことに配慮した丁寧な接客であることが多かった。

また、物事への取り組み方として、ルールの外でのやり方を探ることに躊躇がないように思えた。これは一律に良いとは言えず、規律を重んじる人にとっては許せないかもしれないが、よく言えば合理的なこの考え方はとても心地良かった。比べて、日本人は、他人に無関心であったり、他人に迷惑をかけまいとしたりする人が多く、ルールを守るという意識も高い。そのため、問題が起きても自分のみで解決しようとしたり、あくまでルールの範囲内で解決したりすることが多い。これは、日本人の美德でもあるが、即効性、柔軟性という観点ではよくないだろう。かくいう私も、今回の研修を通して、無意識のうちに様々なものに縛られていたことに気づけた。今後は、この研修中の自由な心情を忘れず、より柔軟に生きることを心がけようと思う。

最後に、今回の留学では黒田奨学会より20万円の留学支援金を援助して頂きました。お陰様でこのような貴重な体験ができましたこと、心より感謝いたします。



MIT学生と一緒に



最終ピッチの発表風景

— 奨学生の近況報告 —

会報奇数号では奨学生から毎月送られてくる近況報告の中から抜粋して掲載しておりますが、今号は日頃顔を会わせることが少ない、関東地区に在住する奨学生に焦点をあて、夏休みをどのように過ごしたか、その一端を紹介したいと思います。



● 関東地区在住奨学生

修士1年

台風の接近や突然の大雨、続く猛暑など、天気の移り変わりが激しく、体調管理や天気予想が難しい日々が続いています。特に室内外の気温変化での体調管理が大変ですが、お気を付けてお過ごしください。

私は早寝早起きや夜のランニングなど何事も習慣化することが得意です。そこで、8月はいつもの習慣に1つ新たな習慣を加えることにしました。8月からオンライン英会話を始めました。

朝、研究室に向く前の英会話習慣をつくり、まだ始めたてですが毎日欠かさず行っています。というのも、就職活動の一環で会社の説明会や企業研究をしていく中で、海外市場に目を向けている企業が多く、入社に英語力の制限はないが、入社後は話せるように努力してもらいたいというように、やはり英語が必須だと痛感したからです。毎日少しでも英語に触れる時間を設けることは大切だと考え、今からでも毎日少しでもコツコツ頑張っていこうと思います。

8月はオープンキャンパスや、高校生の大学見学会が行われました。スケジュールの中には研究室見学・座談会が設けられていました。私は研究室での研究説明を担当しました。その際に、高校生から、なぜこの研究室に入ったのか、研究で大変なこと、生物の勉強はどうしたらいいですかなど、たくさんの質問に答えました。答えていきながら、高校生時代や研究室配属当時は思い出し、とても懐かしい気持ちになりました。これからも初心の気持ちを忘れずに研究生活や学校生活を過ごしていこうと思います。

4年

8/19までソウルで行われる数学科学生のサマースクールに参加しています。それぞれの大学の先生が数回ミニレクチャーをしてくれるため東大にはない専門分野の入門を聴くことが出

来ました。時間が短く講義を聞くだけしか出来なかったのに身についたものはないですが、先生の書いたサーベイがネットに上がっているのので時間を作って読みこもうと思います。数学以外でも日本以外の大学の学生との交流やソウル観光といった初めての経験をすることができました。聞いた感じでは人数が多い等の理由で日本に比べて学部生院生共に日本より競争が激しいという感覚を受けました。競争の是非はさておき自分も頑張ろうと気持ちを再確認する機会になりました。

明日日本に戻るなのでその後はとりあえず院試験勉強に注力しようと思います。

4年

先週一橋大学法学研究科の筆記試験に合格し、8日に面接試験を受けました。合格発表は13日となっているため、今はその結果待ちです。実は筆記試験があった8月29日の直後、コロナウイルスに罹患してしまいました。幸い熱もあまり上がりず症状も軽かったうえに、筆記試験と面接まで1週間以上間隔があったので大きな影響はなく、むしろ家でゆっくり面接の対策をすることができました。そのおかげか面接はかなり手応えを感じて終えることができました。

大学は明日から秋学期が始まります。卒業要件は前期でほぼクリアしたため今学期はかなり時間に余裕があります。興味のある授業をとっていくのか、資料集めやドイツ語の読解力向上など大学院に向けた準備をしていくのか、それとも卒業論文に力を入れていくのか、今はその時間配分等を考えております。羽を伸ばす時間も必要ですが、やるべきことも着々と進めていきたいと思っています。

4年

院試まで1ヶ月を切りました。日々の勉強ではコミュニティ心理学系の本を大全含め6.7冊読み、コミュニティ心理学の考えに少しでも近づけた

のではないかと感じています。元々発達心理学は勉強していたこともあり、残りの期間を利用して質的・量的研究法と生物学的アプローチ（バイオマーカーなど）、統計について深めつつ、総仕上げをしていけたらと考えております。また、英語についても月末から毎日読み、少しでも理解スピードを慣らしていければと考えております。本番に向け、適宜休憩しながら体調に気をつけつつ、仕上げていく所存です。

4年

現在、夏季休業中ですが、夏休みもお盆以外は変わらず週二回ゼミが行われています。また先日、研究内容が決まりました。医療費とデジタル化の間の関係について、データマイニング手法を用いた知識発見の研究を行っています。まだデータを加工している段階で、どのような知見が発見できるかは分かりませんが、母の病気を通じて医療費と深くかかわる経験をしたばかりなので、興味をもって研究を進めています。また、来年度から進学予定の研究室が毎年参加している、データ解析コンペというデータ分析の大会に、その研究室のメンバーとともに参加させていただくことが決まりました。複数の学会が支援して下さる大会で、チームを組んで、来年の3月の最終発表に向けて、データ分析をし、経営的観点を含めた一つの知見にまとめてプレゼンするというものです。

今年は日本経済新聞社から、飲料商品のPOSデータ(顧客の購買履歴データ)を提供していただくことになりました。100-200チームほど出場する中、来年進学予定の研究室は毎年その大会で優勝しているチームであり、企業の実データを分析するという経験を積むことで、データ分析スキル、発表スキル、研究の仕方などを学べる良い機会だと考え、参加を決めました。卒業研究と並行して分析をすることになるので、とても忙しい半年になりますが、奨学会のご支援に感謝し、学部4年間の最後の挑戦、精一杯の努力を続けてまいります。

2年

8月上旬に期末試験が終わり、夏休みに入っております。今回の期末試験は試験科目数が多かったものの、どの科目も手応えがあり、成績発表が楽しみです。春学期の総括につきましては、

来月の報告書にて報告させていただきます。

試験後は、青春18きっぷで4泊5日かけて旅行をしながら福岡に帰省しました。12都府県を巡り、5日で80キロ近く歩くなど中々ハードな旅をしてきました。中でも、名古屋のグルメ、お伊勢参り、奈良の国宝巡りは楽しかったです。名古屋では、きしめん、味噌煮込みうどん、手羽先、小倉トーストを食べ、福岡では食べられない味を堪能することができました。伊勢神宮の神々しさは格別で、また参拝したい思いです。奈良では、薬師寺が最も印象に残っています。特に国宝の東塔を生で見たときは感動しました。日本史の教科書に載っていた仏像や建築物をほとんど見ることができ、濃厚な1日を過ごすことができました。47都道府県制覇まであと15なので、大学生のうちに制覇できたらと思います。せつかくの夏休みなので、充実した日々にしていきます。

2年

先月の末に、駒場読書会という勉強会に再び参加して参りました。引き続きここ数回のテーマは「明治に生きた人々の思想」ということで、今回は岡倉天心が記した文章について議論を行いました。日本人の精神に議論が始まり、欧米の近代的文化との比較を通して、「タイパ」や「コスパ」といった時間対効果や費用対効果などの効率を追い求める現代において、本来重視すべきなのは一体何だろうか、という話題まで発展いたしました。討論が白熱し、2時間の会が一瞬に感じられました。1人で読書をするのももちろん大切ですが、討論を通して議論を深めることの大切さを実感いたしました。

前回の近況報告でも述べさせていただきましたが、私が所属しているサークルの夏合宿の開催が迫ってきており、準備が加速しております。参加者の集計を行ったところ、80人近くの方が参加して下さることになりました。大変うれしい一方で、参加者には社会人の方もいらっしゃるため、途中参加や途中帰宅の方も多く、80人それぞれの方がいつから参加するのか、どのご飯を宿にお願いする必要があるのかなど、調整に追われております。楽しいイベントなどの準備も並行して行っております。準備は大変ですし、それが表に出て褒められることもありませんが、裏方の努力あってこそ全員が楽しめる

ものができるのだな、と痛感しております。

また、先月末に無事に進学選択前最後の定期試験を終えることができました。評価は依然発表されておりませんが、準備したことはしっかり出せたと思っております。私は進学先の第一志望として工学部の「航空宇宙工学科」を選択いたしました。早ければ今月末に進学先が決定いたします。より一層勉学に励んでまいりたい所存です。

2年

会計士試験の勉強をしつつも、それに使う時間の割合は先月より下がって、最近では読書のモチベーションが高まっています。もともと新書が好きなのでよく読んでいたのですが、最近読んだなかでは宇沢弘文の『社会的共通資本』が印象に残っています。農の営み、福祉、教育などのさまざまなコモンズを市場原理から救い出すイメージを提示した短い本であり、いまあげたような例はよく見られる議論かもしれませんが、その中に金融制度を市場から引き離すという内容の章があり、その部分が非常に新鮮でした。投資者・利害関係者の目線で（もちろん市場原理のなかで）ふさわしいあり方を考える会計学のような視点は、気持ちの部分では納得できないこともあり、いろいろな視野から考えつつ、望ましいあり方を自分なりにイメージしておくことが職業人としても重要なように感じます。

今月の前半には新宿のビルで Chim ↑ Pom という視覚芸術のグループの展示会があり、そこに友人とでかけました。展示会の内容というよ

りはそこになぜかドクターフィッシュの水槽が併設されていて、角質を食べてもらえたことが面白かったので付け加えておきます。

最も暑い時期は過ぎたようですが、まだ熱中症は油断できませんし、エアコンをつけて眠ることが多いですね。奨学会の皆様におかれましても、暑さには注意しつつ、健康にお過ごしください。

1年

大学では8月の頭にテスト期間が終了し、大学生活で初の夏休みが始まりました。初めての大学でのテストなので、慣れないところも多々ありましたが、自分なりにしっかりやり切ることができたのではないかと思います。期末レポートの作成など、その過程で自らの教養を深めることもできました。また、ワンダーフォーゲル部では北海道の大雪山系へ夏合宿で行ってまいりました。北海道では珍しい長雨のため、入山が遅れてしまうなどトラブルが多い合宿でしたが、冷静に対応する先輩方の様子を見て自分もまた成長しなければいけないことが多くあることを自覚しました。合宿最終日は気持ちの良い晴れ模様で旭岳に登ることができ、改めて登山を続けていて良かったと思えました。

改めまして、平素より貴重なご支援をいただき誠にありがとうございます。名誉ある黒田奨学生の名に恥じぬようこれからも精進していく所存です。これからも何卒よろしく願いいたします。

●九州地区在住奨学生

8月の近況報告として、中国国籍の庄田朋申奨学生から下記のような帰省の報告が届きましたので、掲載します。

九州大学経済学府経済システム専攻 修士1年 庄田 朋申

8月は前期が終わり、夏休みが始まりました。一週間ほど家でゆっくりした後、中国への帰省でバタバタしていました。7月の懇親会で、今年は中国に帰省しないとお伝えしましたが、銀行口座の手続きの関係で結果的に帰省することになりました。4年ぶりの育った故郷なので、街並みがすっかり変わっていて、思い出の場所がどんどん消え去っていく感傷に浸っています。今回の近況報告をきっかけに、私のバックグラウンドをご紹介させていただきたいと思います。

中国での実家は、中国吉林省通化市という街です。歴史的には「満洲国」通化省通化市でしたが、現在は鋼鉄産業・医薬品産業・ワイン産業が有名な街です。

母方の祖母は、中国残留日本人孤児で、1990年代に家族全員（祖父と母を含めた姉弟3人）を連れて日本に帰国しました。曾祖母（祖母の養母）によると、祖母には兄がいたらしいですが、未だに祖母の日本人の家族は見つかっていません。その後、母は高校の同級生である父（中国人）と結婚し、父を大阪まで連れていき、二人は大阪で10年間暮らしていました。その間、2歳上の兄と私がお阪で生まれました。私が3歳の時に、通化市に残った曾祖母の介護のため、母は4人家族でまた通化市に戻ってくることにしました。

私は、大学入試をきっかけに、日本に帰国することを決意しました。中国で暮らしていた時期にも毎年日本に帰国し、日本文化に触れていましたが、やはり「日本人」としてのアイデンティティーをしっかりと持ちたいと思ったからです。（兄と母は、兄の大学入試をきっかけに日本に帰国し、現在大阪で暮らしています。父は仕事で日本に帰国することができないため、現在は通化市で暮らしています。）

このようなバックグラウンドを持つ私を受け入れてくださり、心より感謝しております。歴史のある黒田奨学会の奨学生になれたことを大変光栄に思っておりますし、「日本」という母国とは「現在」と「未来」だけではなく、「過去」までもしっかり繋がった気がします。

今回の帰省は、二週間ほどの滞在を予定しております。8月15日に福岡から出発し、上海で一晩トランジットし、最終的に実家の通化の空港まで飛びました。上海での滞在時間はわずか17時間でしたが、初めての上海は非常に楽しかったです。上海は東京並みに人が多くて、東京よりもエネルギーで、楽しいけど疲れます。改めて福岡のほどよさに感心しました。

今回の帰省で最も印象的だったのは、キャッシュレスの普及率の高さです。人民元の現金を一銭も持たず中国に入りましたが、支払いは全てQRコード決済で解決でき、困ったこと全くありませんでした。また、電気自動車が多かった印象を受けました。環境系の学会で「中国では電気自動車の販売台数が多い」とよく聞きますが、本当にそうでした。父に充電はどのようにしているのかを尋ねたところ、「充電しないよ」という回答にびっくりしました。実家の通化市には電気自動車用の充電スタンドが少ないので、電池を交換するスタンドが多く設置されているらしいです。充電の代わりに電池交換という形式は充電時間の節約とインフラ整備のための土地の節約にもなるし、投資も少額に抑えることができるので、日本もこのような形式で電気自動車の普及を促進できるのではないかと考えました。

明日はまた父と鴨緑江を隔てて北朝鮮と接する集安市に遊びに行きます。夏休みとはいえ、遊びに気を取られすぎて研究をまともに進められていないことを反省し、今日から毎日先行研究を少なくとも一本読むようにします。

中国吉林省通化市からは以上です。



上海風景



通化風景

行事報告

● 令和5年度 九州地区前期第1回研修会 令和5年6月3日

令和5年度の九州地区前期第1回研修会を6月3日、土曜日に4年ぶりの対面式およびZOOMも取り入れたハイブリッド式にて行いました。発表会に先立って行う個人面談は今回は学部1年生5名のみとし、13時より5名同席のもとで行いました。

午後2時からの発表会では、大学院博士課程所属の学生から始まり、続いて修士課程生3名、学部3年生1名、学部2年生2名と、計7名の発表が行われました。内容は巻末掲載の抄録集を見てもらえば分かるかと思いますが、いつもながらの黒田奨学会研修発表会を特徴づける幅広いテーマでのものでした。発表10分、質疑応答10分という20分間の持ち時間も正確に守られていました。また、参加者からの質問も活発で、特に新入生からの質問が多かったことは久しぶりの対面式ということも影響したのか、印象的でしたし、会の盛り上がりを感じさせてくれました。

最後は恒例により小田部理事による講評ですが、褒めながらも注意すべき点など交えて評価され、学生たちには非常に有意義であったことでしょう。

最後に令和4年度の研究支援奨学金受給者による研究の発表報告があり、さすが修士課程の研究発表であると、納得させられる素晴らしい発表でした。

発表会の中で特に奨学生達に印象を与えたのは、九州大学文学部2年の國崎奨学生による「福岡市中央区舞鶴の歴史」でしょうか。旧黒田藩別邸があった濱町、現在は黒田奨学会事務所の所在地でもある舞鶴に焦点をあて、彼自身が自ら、この地域を散策して調査したものをまとめて発表したものです。

黒田家別邸後に建てられたオフィスビルの賃貸料は奨学金支給の原資ともなっていますが、この敷地一角には昭和58年(1983年)に建立され、第15代黒田家当主の黒田長久様の書によって「黒田家濱町別邸跡」と記された碑が保存されており、これについても紹介してくれました。黒田家別邸跡地のことや、その場所にこのような碑があること自体知らなかった奨学生達は大いに興味を持ったようで、発表会後には渡邊理事の引率のもと、こぞって碑の見学に行ったようです。奨学生達は黒田家歴史の一端を改めて垣間見たことでしょう。

そして、これまた4年ぶりという懇親会となり、会場の中華料理店に全員が集合し、先輩後輩同士、大いに会話が進みました。奨学生達のコミュニケーションが一層深まったことは間違いありません。奨学生達は発表会よりも懇親会を楽しみにしているのは事実のようです。

参加役員：伊達理事長、岡本常務理事(教育指導担当)、渡邊理事(教育指導担当)、小田部理事(教育指導担当)、八並理事(教育指導担当)、野中理事(ZOOM参加、関東関西地区担当)

奨学生参加者

九州地区：発表者、九州地区新入生全員

(岡本)



研修会に参加しての感想

九州大学経済学府経済システム専攻修士1年
庄田 朋申

令和5年度九州地区奨学生・前期第1回研修会は、新奨学生の私にとって初めての研修会への参加でしたが、自分自身の発表・質疑応答を含め、工学・

情報学・物理学・文学・歴史学・生物学など、幅広い分野の発表を通して、新たな知見や視点を得ることができました。

今回の研修会に参加して、皆さんの高いプレゼンテーション能力に感心しました。普段の研究生活では、経済学分野の発表を聞くことが多く、他

分野の発表を理解できるか不安でしたが、皆さんの「分かりやすく伝える」という心掛けの溢れた発表のおかげで、大変良い刺激を受けました。皆さんの発表では、聴き手に対する優しさをしみじみと感じました。高岡さんは、イメージしにくい化学反応を分子レベルまで図解してくださいました。谷口さんは、複雑な計算の説明を厳選されたたった一つの式に凝縮し、たった一つの係数を用いて、宇宙の構造を分かりやすく説明してくださいました。松井さんが専門用語を「緑茶成分X」に置き換えてくださったおかげで、難解なカタカナ語に注意を奪われることなく、研究内容の理解に集中できました。発表準備や文章作成において、「聴き手・読み手に対する優しさ」の重要性を改めて認識し、皆さんの分かりやすく伝えようとする姿勢と分かりやすく伝える技術を見習いたいと思っております。

特に今回の研修会では、発表の題目の選定から、皆さんの世界に対する深い思考を感じ取れました。横山さんの発表を通して、ChatGPTの利用者数の拡大という時代の流れを受け、AI時代において人間が強みにするべき能力はどのようなものなのかについて考えました。工藤さんの発表では、プログラミングで自然言語を処理してみたところ、人間の言葉は多様な機能を持っており、ただの「符号」として処理することが難しいとわかりました。白石さんの発表を通して、『徒然草』で提唱された「無常」の思想を、現代社会で普段の生活にどのように応用していくべきなのかについて勉強になりました。最後は、國崎さんによる舞鶴の歴史に関する紹介で、「なぜここ？」という単純な質問から歴史を辿っていき、過去を現在と未来に繋げていくという素晴らしい締め括りでした。

今回の研修会では、自分自身の発表をしっかりと準備すること以外に、質疑応答において積極的に発表者とディスカッションを行うように心掛けました。懇親会で、理事の先生方から「非常に活気のある研修会でした」という好評を受け、大変嬉しく思いました。今年度の残り3回の研修会でも、質問を通して奨学生の皆さんとコミュニケーションを取りたいと思います。

九州大学文学部人文学科2年 國崎 康平

今回の研修会における発表のなかで、私は「言葉」のあり方について特に関心を深めました。発表順に申しますと、まず、横山さんによる今話題のChatGPTについての発表では、AIが0から1を生

み出すことが苦手であるということが紹介されました。蓄積されたデータを学習するため「癖」が生じ、事実認定にも難があることを学びました。誰しも言葉に癖があるものですが、流行語となるような「突飛」な言葉や仲間内だけで通用する言葉、意図的に誤用した言葉などは、人間に特有なのではないかと考えました。

工藤さんの発表では、まずプログラミング言語に対置する「自然言語」という用語に、普段自然言語のみを扱う者として新鮮さを感じました。また、単語をベクトル化して、さらには引き算をすることができることは大きな驚きでした。日常的な言語活動と全く異なるプロセスであり、プログラミングが普及することで人間もその影響を受けることもあるのかと考えさせられました。単語の意味を前後の単語から捉えると対義語を理解し難いということは、工藤さんの発表で初めて知った点であり、文の構造と意味の連関の断絶した一面を学ぶ機会となりました。

白石さんの発表の質疑応答において、徒然草がどのように現在にまで残されたのかという問題が提起されました。現代のように紙が豊富でない時代に、なぜ紙に叙述し、彼の死後も価値が見出されたのか。当然のように古いものに価値を見出す歴史学を専攻する私にとっても興味深い論点でした。一方で、現代の私たちの日記あるいはSNSなどは後世にどう扱われているのか、今一度私たちの言葉を内省するきっかけにもなりました。

今回の研修会が、事務所に伺う3度目の機会となりました。入室した際、「お帰りなさい」と、また退室する際は「行ってらっしゃい」と声をかけていただきました。初めてのことでしたので少々驚き、そして私の発表内容を思い起こしました。明治時代以降、黒田奨学会などの場が、方々に移った筑前出身者の帰るべき場所となってきたという歴史的過程が、現在にも息づいているのだと推察いたしました。今回、初めて対面での研修会・発表会に参加したことで、このように温かく迎えていただき、さらには黒田家を中心として連綿と続く同郷のつながりのなかに私自身を見出すことができました。面映ゆい気持ちを拭いきるまでに時間を要するかと存じますが、「ただいま帰りました」と自然にご挨拶できるよう、奨学会の歴史を胸に、自今以後も研鑽に励む所存でございます。



● 令和5年度 九州地区前期第2回研修会 令和5年7月8日

令和5年度の九州地区前期第2回研修会を7月8日、土曜日にZOOMを用いたハイブリッド方式にて行いました。発表会に先立つ恒例の面談は今回は省略ということで、午後2時より発表会を始めました。修士1名、医学部5年1名、学部生3名の5名の発表でしたが、そのうち、3題の発表が医学系のものになったことはスケジュール作成者としても反省点となりました。年度当初に奨学生の皆さんには都合を聞いてスケジュール作成をするのですが、変更依頼が相次ぎ、結果として最初の計画から大幅に変更をせざるを得なかったことが原因のようです。

また、今回は小田部理事による恒例の講評がなく、発表者の中には少々、残念な思いをした学生もいるようでした。残念と言えば、前回に引き続きのハイブリッド発表会でしたが、関西地区、関東地区の奨学生参加が全くなかったことでしょうか。

そして第1回に引き続き、今回も研究支援奨学金受給者の研究発表が行われ、30分の限られた制限時間内で十二分に成果を発表してくれました。

発表会終了後は発表者や新入生が参加しての懇親会でしたが、和気あいあいとした雰囲気の中、良く飲み、良く食べ、良くしゃべり、大いに盛り上がり、名残を惜しみながらの散会となりました。

参加役員：伊達理事長、岡本常務理事(教育指導担当)、八並理事(教育指導担当)、野中理事(ZOOM 参加、関東関西地区担当)

奨学生参加者

九州地区：発表者、九州地区新入生全員

(岡本)

研修会に参加しての感想

九州大学薬学府修士1年
中橋 凜太郎

研修会は「他分野の学生と交流する重要な機会」であると考えており、実際研修会、懇親会を通して多くの学生と交流し、自分の知見や考え方を広げることができたと思います。また、第1回の研修会に参加できなかったため、初めての研修会となったが、発表者全員のクオリティーの高さに驚きました。今回は、山田さんと新井さんの発表に関して、自分が感じたことを述べたいと思います。

まず、山田さんの発表では、SERSセンサの応用研究について学ぶことができました。私は薬学部出身であり、ラマン散乱光や疾患の診断ツールに関する基礎知識を持っていたため、非常に興味深い発表でした。患者さんの負担を考慮すると、血液検査などの侵襲的な手法ではなく、負担が少ない非侵襲的な疾患の診断法が必要とされていると思います。山田さんはSERSセンサが高感度な分析が可能であることから、皮膚ガス測定による非侵襲的な疾患の診断の可能性を述べていました。

また、薬学部の授業では、疾患の診断に応用できる様々なバイオマーカー(糖尿病:HbA1cなど)を学習してきたが、多くは血液中や臓器の組織に存在している分子を対象としていました。山田さんの発表を聴講し、皮膚から出るガスをバイオマーカーに応用できる可能性があるという新しい知見を得ることができました。山田さんは今後の展望を見据えたSERSセンサに関する研究をされており、非常に興味深く、かつ社会貢献に繋がる研究であると感じました。今後の研修会での発表を楽しみにしております。

また、新井さんは、医療業界の人手不足という問題に対し、仮眠の質を向上させるという手段を考案していました。新井さんは看護実習という実体験を基に、医療業界の課題というのを再認識し、課題を解決するためのカギを提案できており、非常に説得力の強い発表だと感じました。今後、発表を行っていく上で「説得力」は重要な能力であると思うので、新井さんの発表を参考にしたいと思いました。また、ユーモアのある発表タイトル(「迫りくる人手不足に早めの処方箋 ―看護師の働く環境デザイン・睡眠編―」)となっており、聴講する前から興味を引く発表となっており、すごいと感じました。

研修会全体を通して、発表の質が高く学びの多い貴重な時間となりました。こうした素晴らしい

環境に身をおけていることに感謝したいと思います。また、同年代の優秀な学生の存在は自身の研究活動の原動力となっています。私も周りの学生に影響を与えられるような発表ができるよう精進したいと思います。

長崎大学医学部2年
林 宏輝

7月4日に行われた、九州地区前期第2回研修会・発表会に参加させていただきました。今回の研修会は、zoomと対面を併用したハイブリッド形式での開催となりました。計5名の院生・学部生、1名の研究支援金奨学生の総勢6名が発表に臨みました。オンライン形式にも良さはありますが、実際に直接聴けるといのは場の空気感も味わえるという点で非常に有意義でした。私自身、黒田奨学生2年目ということもあり、対面での発表は初めてで、学ばせていただくことが多い実りある経験をさせていただきました。

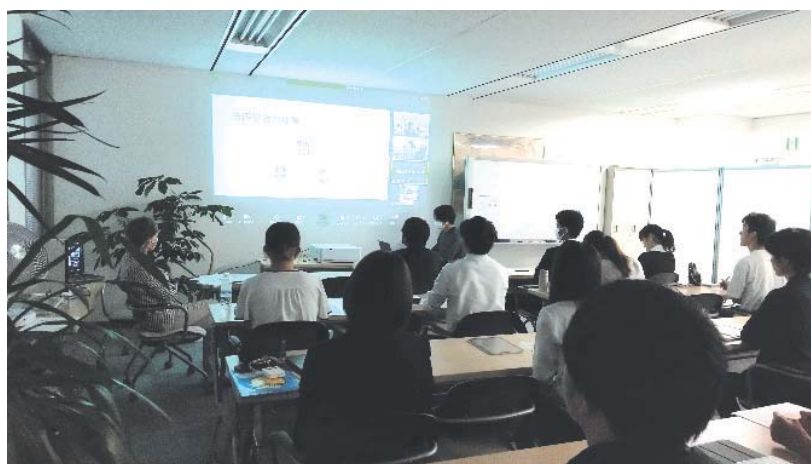
私は「法医学」にまつわる発表をさせていただきました。私は、1年の冬から大学の法医学教室に通わせていただいています。ここでは、警察官立会いのもと行われる司法解剖の現場を見学、正常・異常な臓器の観察、といったことをさせていただいております。「法医学」というのは、臨床医、研究医に比べ、あまり親近感の湧かないものだと思います。そもそも、医学自体が非常に難解で、なかなか身近な学問ではないかと思います。こうしたところを踏まえて、分かりやすい説明を心掛けました。発表後の質問によって、もう一度自分の発表内容と向き合うことができ、さらに自身の知らない知識を認識できたことは大きな学びになりました。

今回は、過半数の発表が医学・生命科学系をテーマとするものでした。自身が学んでいる分野であるので、特に理解しようと努めましたが、専門的なものもあり、自身の知識不足を反省させられるところもありました。特に印象に残ったのは、夜勤看護師の労働環境を睡眠の観点から見た発表で、実際に理想の仮眠室をデザインされていたりと、プレゼンの構成・内容とも非常に分かりやすく、参考にさせていただきたいと思いました。この先輩に限らず、発表者の方々皆さんの発表に、テーマとプレゼンスライドに統一感があり、今後は是非参考にさせていただきたいと思いました。これに加え、補足資料を用意されており、それが聞き手の手元にあることで、より一層発表内容の理解が促進されました。発表内容だけでなく、それらを取り巻く環境を整えられていることが、良い

発表に繋がっているのだと感じました。

対面形式での発表の経験の少ない私にとって、
学ばせていただくことが多い研修会となりました。

今回の研修会での反省と学びを、今後の発表に活かしていきたいと思います。



● 令和5年度 関西地区研修会 令和5年9月2日

令和5年度の関西地区研修会を9月2日、土曜日に行いました。4年ぶりの対面式での発表会です。

研修会の一環として行っている個人面談に関しては昨年と同様、夏休みを利用して8月中に全員の面談を済ませており、当日のスケジュールは発表会と懇親会です。

開始は12時10分、それまでに奨学生達には昼食を各自済ませて集まってもらいました。岡本は前日より入り、岡本以外の役員は当日に福岡、東京からの現地集合ということでしたが、開始前には全員揃いました。

学部4年生3名からスタートして学部1-3年生まで10名、最後に院生1名、計14名の発表が行われましたが、院生以外は全員が初の対面式発表ということで、特に1年生はかなり緊張しているように見えました。それなりに無難に発表を終えることができたようです。

内容的にはいつものながらの黒田奨学会研修発表会を特徴づける、文系理系を含めた幅広いテーマでの発表でしたが、今回の特徴としては医学・薬学系の発表が1/3を占めていたことでしょうか

また、今回の発表会では対面式のみとなり、ハイブリッド式ができなかったことと、小田部理事欠席のため、恒例の講評がなかったことは残念でしたが、それでも3セッションでそれぞれ座長役を務めた3人の教育指導担当や、野中理事、伊達理事長からは質問はもちろんのこと、発表のやり方、power pointの作り方に対してもかなり厳しい意見も出され、学生にとっては今後の反省点となったのではないのでしょうか。来年はより一層の向上を期待したいものです。

発表会後の懇親会は盛り上がりました。学生たちは毎年ZOOMで顔を見ていたというものの、あくまでの画面越し、実際に顔を突き合わせて話すと今までのイメージとは全く違った感じで少々戸惑いさえ覚えたようでしたが、予定していた2時間があっという間に終わり、非常に有意義で楽しい懇親会でした。

ということで、正午から午後8時までの8時間、長時間の研修会でしたが、無事に終了しました。
お疲れさまでした。

参加役員：伊達理事長、岡本常務理事(教育指導担当)、渡邊理事(教育指導担当)、八並理事(教育指導担当)、野中理事(関東関西地区担当理事)

(岡本)

研修会に参加しての感想

大阪公立大学医学部医学科2年
牛島 陸斗

令和5年9月2日土曜日に関西地区研修会・発表会が開催されました。自分にとっては初めての対面で行われる研修会で、普段全く関わりのない分野のお話を伺うことができたことや、初めて関西地区の奨学生と顔を合わせることができたことがとてもうれしく、大変有意義な時間であったと感じました。

研修会では理工系分野の発表が5名、医歯薬系分野の発表が5名、文系分野の発表が4名の計14名の発表で、理工系の建築学的な発表や地学的な発表、文系分野では経済学的な発表や文学的な発表などさまざまな興味深い発表があり、とても関心を持って聞くことができました。

理工系分野の発表の中の山田さんの1秒の精密性に着目した発表では、われわれの身近にある時間の定義やその変遷、将来などがうまくまとめられた発表となっていて、まとめ方や論の展開、話の広げ方など、自分の発表に取り入れていきたい部分が多くあり、とてもためになる発表でした。また、東さんの動吸振器の発表は、日本にはありふれた地震という災害から高層な構造物をどう守っていくのかといった話で、初めて聞くような内容ではあったものの、とてもわかりやすく、都市開発にも活かしていく素晴らしい発表で、自分の発表にも活かしていきたいと思いました。

文系分野では小河さんのルイーダ・イッリカという台本作家についての研究を実際にイタリアに留学しつつ行われたということで、イタリアでの生活等のお話も交えつつ、とてもおもしろい発表でした。

今回初めて対面で研修会に参加したということで、ZOOMでの画面越しの研修会とは違い、発表の臨場感があること、また発表する時の話し方や目線などが重要であるように感じられる、これからのプレゼンテーションなどで活かしていくためにも、多くの人から見習うことの多い研修会となりました。

自分の発表では、話を広げすぎてしまったり、うまくまとまらなかったりと多くの反省点があり、自分の伝えたかったことがうまく伝わらなかったと実感しました。来年以降の研修会では、聞き手が聞き入るような面白い発表を目指し、精進していきたいと思っています。

研修会後の懇親会では、普段関わりのない他大学の奨学生から様々なお話を聞くことができる

貴重な機会で、とても有意義に過ごすことができました。大学や学部などによってシステムや実情が全く違ってとても刺激的でした。

工夫が凝らされた発表をたくさん聞くことができ、とても楽しく、貴重な学びの機会となった発表会でした。来年以降に自分の発表が面白いと思ってもらえるよう、頑張っていきます。ありがとうございました。

京都大学薬学部3年
宮崎 結生

今回の研修会は私にとって初の対面での開催となりました。今までのオンライン上での研修会では奨学生の皆さんと直接的なやりとりができなかったため、一方的に相手のことを知っているような感じていたのですが、今回の研修会、その後の懇親会でのやりとりを通して、文字通り「知り合い」になれたように感じています。

今回の私の発表は薬の体内動態を制御することで、副作用の軽減、効果の最大化を行うというドラッグデリバリーシステム(DDS)に関するものでした。理事の先生方にご指摘いただいた通り、私のこの発表は最も伝えたいことが何か分かりづらかったり、単に授業で習ったことをそのまま伝えるだけであったり、略語を使っていて専門分野外の方には分かりづらかったりと反省点が多く残るものでした。今回ご指摘いただいた内容を踏まえ、来年の研修会では皆さんに薬学に興味を持ってもらえるような、より良い発表となるようにしたいと思います。

先輩方の発表は、専門分野が異なる私でもわかりやすく、また非常に興味深い内容でした。特に、山田さんの1秒の精密性を向上させることで、高低差やマグマだまり、地殻変動、地下資源の有無などがわかるという話に興味を持ちました。また、関西地区唯一の同学年の今井さんの発表は小中学生に企業分析の手法について教えるという話で、企業分析について全く知らない私でも発表内容が理解でき、とても分かりやすいと思いました。スライドに写真がよく用いられているため、見やすく、また、こういった形でその講義が行われていたのか想像しやすかったです。

そして、後輩の皆さんの発表はその内容についてよく調べられていると感じました。後輩には薬学部生の方が多く、その方々の発表を聞いて、自分が同じ分野だからこそ、相手に伝わるようなわかりやすい発表をしていると気づきました。専門用語を使う場合はそれがどういう意味であるの

か伝え、そして略語をあまり用いない。そういったことがきちんとできていると思いました。学生の皆さんの発表を聞いて、自分の発表の良くなかった部分やどうやってそれを改善するかに気づきました。

研修会では自分の専門分野を知らない方にお話しする、逆に自分が全く知らない分野について

の発表を聞くという二つの経験ができました。この経験を通して、自分の発表の改善点を見つけるというだけでなく、全く知らなかった分野に興味を持つようになりました。このような貴重な経験ができる研修会に参加させていただきありがとうございました。



● 令和5年度 九州地区後期第1回研修会 令和5年10月7日

令和5年度の九州地区後期第1回研修会を10月7日、土曜日の午後2時半よりハイブリッド形式にて行いました。個人面談は前回に引き続き、今回もなしということで、発表会のみでの研修会でしたが、予定していた7名の発表者のうち、2名が急遽、体調不良のために欠席となり、スケジュールを変更しての開催となりました。

大学院修士課程生が1名、医学部5年生が1名、学部4年生が1名、1年生2名の計5名の発表が行われました。ハイブリッド式で行うにあたり、事前に事務職員が苦勞してシステムを立ち上げてはいますが、途中でトラブルもありました。それでも素早い対応の結果、発表会は難なく無事に終了しましたが、せっかくハイブリッド式で行ったにもかかわらず、参加者は九州地区在住の3名のみで、関西地区や関東地区からの参加者がゼロだったことは非常に残念で、事務職員の人たちの努力が報われなかった感があり、私としても心残りがあるものでした。参加者はこの3名のZOOM参加者も含めて18名でした。

午後5時半から開かれた懇親会は発表者、新生が参加し、総勢19名、大いに盛り上がったことは言うまでもありません。

参加役員：伊達理事長、岡本常務理事(教育指導担当)、重藤常務理事、渡邊理事(教育指導担当)、
小田部理事(教育指導担当)、八並理事(教育指導担当)、安川教育指導担当

(岡本)

研修会に参加しての感想

九州大学医学部医学科5年
松崎 広太

今回、3年半振りに対面での研修会に参加しました。対面であるからこそ、発表の熱量やニュアンスが伝わり、オンライン発表はやはり少し無機質だったなと感じることができました。また質疑応答も非常に活発に行われ、全体的に素晴らしい研修会となったように思います。

後期第1回研修会では私を含めて計5人の奨学生が発表を行いました。

小山田さんのプレゼンは、九州地区の人間には大きく関わる「警固断層地震」に関してのものでした。恥ずかしながら私は初めてその存在を知ったのですが、プレゼンを拝聴することで、災害対策を進める上での被害の想定の手法について触れることができ、興味深かったです。個人的にも、小山田さんのプレゼンでは、毎回関心を持ちやすい分野に関する独自の解析結果を発表してくださるのでとても楽しみにしているところです。

榎木野さんのプレゼンでは、なかなか素人には想像が付きづらい「材料分野」に関してその一端に触れることができました。日々手術室で何気なく目にしていた「金属プレート」ですが、毒性が少なく耐久性の高いものへと進化させるためにこのような研究が行われているのかと、とても勉強

になりました。このように普段目にしているものに対して、まるで違った見方ができるようになるところが、研修会の良いところだと感じました。

今回の研修会では初めて、一年生による発表も行われました。

今井さんのCovid-19と肝機能低下の関係性に関するプレゼンでは、答えのない問題に対して取り組み発表しようとするその姿勢に感服しました。自ら問題を見つけ仮説を立てようとする姿勢は研究にもつながることかと思えます。確証のないことを発表するのはプレッシャーがかかることですが、語り中心な手法も含め、独創的なプレゼンでした。

もう1人の一年生工藤さんの発表のテーマのロケット開発は、発表の流れ・内容が非常にわかりやすく、その技術を感じました。またパワーポイントに関しても、完成されたレイアウトでとても見やすかったです。個人的にはその歴史についてとても興味深く拝聴し、始まりが「火箭」という中国の武器であったことは新たな発見でした。また質疑応答も盛り上がり、やはり「ロケット」は関心の高いテーマであるということが再確認されたかと思いました。

実は今回の発表はzoom上でも配信されている「ハイブリッド開催」でした。しかしオンライン配信は設備・運営面でとても難度が上がるものです。

配信のご準備をいただき、またトラブルにも冷静に対処いただいた事務局のお二人、小田部理事、誠にありがとうございました。

九州大学医学部医学科2年 白石 陽生

今回の研修会では、様々な分野の5名の奨学生の方々が発表されました。普段あまり勉強する機会のない分野の発表でも、なるべく難しい言葉を使わず丁寧に発表してくださったおかげですんなり理解することができましたし、自分の専門に近い分野でも、私には思い付かないような独自の着眼点で研究されていて、多くの学びを得ることができました。また、パワーポイントのスライドにも、手書きの絵を挿入したりするなど発表者それぞれ独自の工夫がみられ、面白く、内容もしっかり伝わってくる発表となっていました。

次に、各発表の感想を述べます。小山田さんは、もし警固断層地震が発生した場合の住宅被害を推計し、仮設住宅の供給が間に合うのかについて検証されていました。私の実家がある博多区は震源に近いのか住宅喪失世帯数も平均全半壊率の値も大きいので、地震で住宅を失ってもすぐに賃貸住宅を借りられるような金銭的余裕を持つように備えておきたいと思いました。

松崎さんの発表では、SAS(睡眠時無呼吸症候群)のメカニズムとその影響について取り上げられていました。SASの患者の4割は肥満ではないことを知り、イメージと違ったので驚きました。また、SASによる日中の作業効率低下が重大な交通事故につながったりするなど、SASは私が思っていたよりも社会に大きな影響を与える病であることに気付かされました。

榎木野さんの発表では、材料科でどのような研究を行っているのかが紹介され、工学の主な材料である金属の強度を高める方法として、結晶粒微細化強化が紹介されていました。私は化学の結合や結晶の分野が高校時代から好きなので、榎木野さんの発表を聞いて、結晶粒微細化強化の仕組み

について、自分で調べてみたいと思い、また材料科自体にも興味をもつようになりました。

また、今回の発表では、今井さんと工藤さんの2人の1年生の発表が行われました。今井さんは、自身が半月板断裂治療で検査を受けた際の発見について発表されていました。血液検査で肝機能に関する数値に異常がみられた際に、医師からCOVID-19との関連について言及され、そこからCOVID-19と肝機能との関連について調べたのですが、大怪我を負って余裕がない時でもそうした些細な気づきを無下にしない姿勢に感銘を受けました。

工藤さんは、自身が興味をもつロケットの歴史と今後の課題について発表されていました。宇宙をアメリカやヨーロッパなどと同じような旅行先の選択肢として考えられる未来を実現したいという工藤さんの志を聞いて、私も応援したいと思いました。

最後に、今回の研修会の冒頭で伊達理事長の仰っていた「挑戦」についても言及させていただきました。伊達理事長は、奨学生の中には奨学金受給資格であるGPA2.5以上を死守するために、高い評価を得やすい簡単な講義を選択している人がいるのではないかと指摘されていました。そして、もっと失敗を恐れずに、難しいけれども興味深い内容の講義を選択するなど、新しいことに挑戦してほしいと仰っていました。私の学部は2年生から時間割を自分で組むことはなくなるのですが、まだ自由に時間割を組むことができた1年時には、私は選択授業の枠を全て難しい化学の講義で埋め、試験に悪戦苦闘しながらも、高校時代から興味があった有機化学や結合論の授業をワクワクしながら受けていたことを思い出しました。私が研究した徒然草の内容にも通じることですが、人生の終わりは予告なく、しかし必ずやってくるからこそ、何事も先送りにせず、少しでも興味をもったものは道のりの厳しさなど関係なく挑戦したいと、伊達理事長のお言葉を聞いて改めて決意しました。



● 令和5年度 九州地区後期第2回研修会 令和5年11月11日

令和5年度最後の九州地区研修会、後期第2回研修会を11月11日、土曜日の午後2時半よりハイブリッド形式にて行いました。発表者は、前半が院生3名と3年1名、後半は2年2名と1年2名の計8名の奨学生でしたが、関西地区研修会で発表できなかった2年の才田学生が今回、九州地区に初参加となりました。

発表テーマとしては、専門的なものから比較的馴染みやすいものまでという、いつもの黒田奨学会研修会の特徴でもあるのですが、特に今回は解剖実習、臓器移植といった、日常的には関心があっても中身には触れる機会がないといった医療倫理的なテーマについて奨学生達の印象が強かったように思います。

発表会後の懇親会では4回目の参加となる1年生はさすがに我々スタッフや奨学生先輩たちとも会話が進み、発表会だけでは得られない情報共有もできたのではないのでしょうか。

年4回の九州地区研修会、非常に有意義であったことは言うまでもありません。奨学生達の今後の発表向上を期待したいものです。

参加役員：伊達理事長、岡本常務理事(教育指導担当)、重藤常務理事、渡邊理事(教育指導担当)、八並理事(教育指導担当)、安川教育指導担当

(岡本)



研修会に参加しての感想

九州大学システム情報科学府修士1年
藤本 隆晟

この研修会での発表概要を通じて、多岐にわたる研究分野の奥深さと、学問が社会に果たす役割の重要性を改めて感じました。私は今回初めての研修会での発表で、自分の研究(プライバシー保護)についての発表を行いました。専門外への人への説明する機会があまりなかったため、スライド作成のときからその難しさを感じました。今回の課題としては、前提を多く説明してしまい、研究内容を深く説明できなかったのが来年はそれを説明できるようにしたいと思います。

高山さんによる地震観測の方法の紹介は、自然災害の多い日本において重要な研究です。地震計の設置からデータの波形分析までの過程を理解することで、地震予知の精度を高めるための研究への期待が膨らみます。

中橋さんの炭素連結型糖アナログの合成研究は、

化学の可能性を新たな領域に拓げる示唆に富んだものです。天然物の微細な構造変換により生み出される新たな化合物が、将来の医薬品開発にどのように役立つのか楽しみです。

福井さんの解剖実習に関する発表は、普段私たちが目にするのではない「解剖」という場について、目的や実習内容を知る良い機会となりました。解剖実習は医学生としての命の重さを学ぶ場であり、これから医者として活躍するためにも頑張りたいと思いました。

才田さんの小型風車に関する研究は、再生可能エネルギーの普及という現代社会の課題に対して具体的な解決策を提示しています。風車の効率を高めるための革新的なアイデアが、今後のエネルギー危機を乗り越える一助となることを期待します。

吉田さんのアントレプレナーシップに関する学びは、単なるビジネススキルの習得を超え、新たな価値を生み出す原動力としての起業家精神

の重要性を教えてくださいました。海外での経験を通じて得られた知見が、これからの彼の挑戦にどう影響を与えるのか楽しみです。

中川さんが取り組んだ臓器移植の現状に関する発表は、医療の現場で直面する倫理的な課題を浮き彫りにしています。臓器移植を必要とする人々への支援が、どのように改善されるべきか、その解決策に向けた議論の必要性を感じさせます。

最後に、山野さんによる観光都市としてのベネチアと京都の比較研究は、文化的遺産を守りながら観光を持続可能な形で発展させるためのヒントになる研究だと思います。オーバーツーリズムという現代の課題に対して、どのようにバランスを取るかは、多くの観光都市が直面する共通の問題だと感じています。

総じて、これらの発表はそれぞれが専門分野における深い洞察を提供するとともに、学術がいかにして社会に貢献できるかの具体例を専門ではない私たちに簡単かつ明確に説明してくれ、私自身とても勉強になりました。

九州大学工学部Ⅲ群1年 工藤 健太

今回の九州地区研修会・発表会においても、自分が専攻している分野とは異なる様々な分野の話聞き、議論を交わすことが出来たのでとても充実した研修会だったと感じています。

最初に高山さんが発表して下さった地震観測の方法については、地震計がどんな波を計測しているのかやデータの分析方法などを詳しく知ることができ、知識だけでなく地震に対する新たな視点を得ることができたと思います。

二番目に藤本さんが発表して下さったプライバシー保護については、データにノイズを加えることでプライバシー保護を行うという方法があることに驚きました。また、「セキュリティ」や「プライバシー保護」といった言葉の正確な意味も知ることができました。そして何より驚いたのは、藤本さんが起業しているということです。そういう方々の存在は認知していましたが実際に身の回りで起業している人の存在を知ると、改めてその凄さを実感しました。

三番目に中橋さんが発表して下さった炭素連結型糖アナログの合成研究については、スライドが英語だらけだったりして内容に付いていくのに必死になってしまいましたが、同じ分野を専攻している先輩方や、先生方の質疑応答を聞いて、内容を理解していくことが出来ました。

四番目に福井さんが発表して下さった解剖実習については、解剖実習がどのように行われているのかやご遺体の管理方法、解剖実習における現状などを知ることが出来ました。また、大学二年生の段階で人の身体にメスを入れて解剖を行うということにとっても驚きました。

五番目に才田さんが発表して下さった小型風車については、そもそも高専時代からこのような研究に取り組んでいることを知ってとても驚きました。また、今回の発表内容である研究の続きもぜひ知りたいなと思いました。

六番目に吉田さんが発表して下さったアントレプレナーシップについては、具体的にどのような活動を行っているのかを知ることが出来てとても良かったです。また、吉田さんが独自で行った活動内容なども知りたいなと思いました。

七番目に中川原さんが発表して下さった臓器移植については、臓器移植に対する認識の低さを再認識することが出来ました。また、臓器移植に関する情報提供の仕方もいろんなものがあるのだなと感じました。

最後に山野さんが発表して下さったオーバーツーリズムについては、世界遺産の存在意義について改めて考え直すことが出来ました。

公益財団法人黒田奨学会に対する寄付継続のお願い

公益財団法人黒田奨学会は、旧筑前藩主・黒田家から出資された基金によって1915年より108年間にわたり、旧筑前藩内出身の学生に対して奨学金の給付を続けてまいりました。

奨学金給付の原資は、黒田家から寄贈された基金及び土地の資産運用益とOB・OG、黒田家関係者、当奨学会への理解者からの寄付金により成り立っており、頂いた寄付金は奨学会の基本財産に繰り入れて基本財産充実を図りながら、その運用益を奨学生の奨学金に充てております。

お陰様で多くの寄付金が寄せられており、奨学会卒業生の中には毎年決まって寄付して下さる方もおられ、黒田奨学会を忘れずにいてもらえることは嬉しい限りです。

また、先日は、当奨学会のホームページを見た一市民の方から、若い人に役立てて欲しいということで、多額の御寄付を頂きました。当会の目的を御理解いただいたことに対し、心から感謝申し上げる次第です。

当奨学会は奨学金を支給するだけでなく、研究発表等の研修にも力を入れ、また、特に援助を希望する学生には入学準備金や、海外留学支援金、研究支援金といった援助も行っており、これら奨学事業には皆様の浄財が大きく寄与していることは言うまでもありません。

公益財団法人にとっては、『3,000円以上の寄付者が、過去5年にわたり平均して70名以上いる事』を条件として、税控除認定法人の資格を取得し維持しております。当奨学会では令和元年から令和6年10月まではこの資格を維持することができるのですが、現段階では寄付者数や額が満たないためにこの条件を達成することが困難となっていることから、地方税納付における優遇制度が認められない可能性が出てきております。

3,000円で結構です。引き続き、大勢の皆さんの御協力をお願いする次第です。

黒田奨学会出身の郷土の若者達が将来、世界や日本の社会で広く活躍する為の投資とお考え頂き、今後も寄付金募集への御理解と御協力を賜りますよう、重ねてお願いいたします。

申込書は会報とじ込みの「払込取扱票」をご使用ください。

令和5年度奨学会基金への寄贈者（敬称略、順不同）

令和5年4月1日～令和5年10月31日（ ）は黒田奨学生OB、OGの卒業年

中 田 蓮太郎 (R5)	久保田 康 史 (S43)	三 角 啓 介 (H19)
石 津 宗 久 (H1)	瀬 口 友 樹 (H28)	中 村 義 則 (S61)
今 藤 恵 子	東 寺 裕 康 (S61)	奈良崎 修 二 (S55)
今 藤 久 夫	小 倉 菜 穂 (R5)	
木 村 菊 子	伴 曜 价	
吉 田 隆 治	井ノ口 正 浩	
山 下 謙	井ノ口 功 基 (H28)	その他 匿名希望 10名
菊 池 武 之	中 川 久 幸	

編集後記

令和5年度瑞藤会会報95号が完成しました。この数年来の編集後記ではコロナ感染状況を綴っていますが、令和5年はコロナウィルス完全撲滅とまでいなくても、ようやく感染者が減少し、巷ではマスク着用者は2-3割程度でしょうか、少なくなっています。黒田奨学会でも年に6回の研修会全てで待望の対面式発表会を行うことができました。やはり、顔を見ながらのコミュニケーション、その効果は絶大のようで、会報でも奨学生たちが感想を述べてくれています。皆様も同じ思いを感じ取られたことと思います。

今号の巻頭言は、私の防衛医大勤務時の教え子にあたる、大分大学教授の徳丸治氏が執筆してくれました。学生時代から優秀で超真面目だった彼ですが、悩みや迷い、不安を感じながらのこれまでの人生、そして医者、研究者、教育者としての歩みの一端を語ってくれました。奨学生たちの今後の人生に大いに参考になったことと思います。

長い人生、希望通りに行かないことは多々あるかと思います。思いがけず訪れたエポック、人生の転機としてどう捉えるか、どう生かしていくのか、与えられた環境下で自分の能力を信じて挑戦して欲しいものです。その結果が黒田奨学会の理念である「社会貢献」の実践につながるのではないのでしょうか。

さて、私、岡本は瑞藤会会報の編集責任者としては95号を最後とさせていただきます。

大学教授時代に学術雑誌編集長を経験した関係で、自分から手を挙げて2015年79号より会報編集に携わってきましたが、やはり学術雑誌とはまったく勝手が違い、大役を簡単に引き受けたことを後悔しましたが、何とか、毎号出版にこぎつけることができました。それでも発刊後、皆様のお手元に会報が届く頃には、不備な点やミスなどあるのでは？と不安感ばかりで、実際に叱責の言葉を頂戴したときには自信喪失、自分が情けない思いをしたこともありました。御迷惑をかけた方々には改めてこの場をお借りして謝罪いたします。一方で、「今回のテーマは非常に面白かった」、「内容が充実し、楽しめた」など、その都度、励ましの言葉を送って頂いた方には心からお礼申し上げます。

さて、次号からは新しく赴任された重藤常務理事に編集をお願いしております。また、違ったスタイルの会報が生まれることでしょう。皆様、乞う御期待！です。

本年9月に常務理事に就任した重藤でございます。今はまだ黒田奨学会の活動全般について勉強しているところですが、10月と11月に開催された九州地区後期研修会に参加させていただき、当奨学会が奨学金による支援のみならず、目的でもある人材育成にいかに重きをおいているかを実感したところです。発表会では、学部1年生から大学院生までがそれぞれの研究テーマについて、10分という短い時間にいかに効果的、効率的な発表ができるかに苦労しつつ、その後の奨学生同士の質疑応答や教育指導担当の先生方からの指導・アドバイスを通じて多くの学びがある有意義な機会だと思いました。

また、この会報に寄せられた奨学生の感想文から、奨学生自身がそのことを理解し様々なことを学び取っていることが伺われ大変心強く思っているところです。（重藤）

会報95号が皆様のお手元に届く頃には令和5年も残り少なくなっています。迎春を迎えるに際して、皆様の御健勝とご多幸を祈りながら、編集責任者として結びの言葉とさせていただきます。

令和5年12月15日

編集責任者 岡本順子（常務理事）

黒田奨学会研修会・発表抄録集

九州地区前期第1回研修会 令和5年6月3日

1. CO₂電解還元によるマルチカーボンの生成を目指した電極触媒の検討

九州大学大学院工学府 応用化学専攻機能物理化学博士1年
高岡 祐太

カーボンニュートラルの観点から、再生可能エネルギーを用いるCO₂電解還元(CO₂RR)が注目されている。CO₂RRでは、CO₂を電気化学的に還元することで有用な化合物へと変換することができる。しかしながら、CO₂RRはCO₂転化率や、マルチカーボンへの変換効率が低いという課題を抱えている。これらの課題の解決に向け、電極触媒という点に注目した我々の研究計画と進捗状況を本研修会において発表する。

2. 環境の観点からのグローバルサプライチェーンにおける重要な航路と港の特定

九州大学大学院経済学府 経済システム専攻修士1年
庄田 朋申

国際海運由来のCO₂排出量は、世界のエネルギー関連CO₂排出量の約2%を占めており、今後も国際貿易の増加によって国際海運由来のCO₂排出量が増加すると予測されている。本研究は、国際貿易における主要な船舶の一つであるコンテナ船に着目し、コンテナ船由来のCO₂排出量を推計し、世界のコンテナ運輸ネットワークを可視化することで、環境負荷の高い港・航路を特定する。結果として、シンガポールは最もCO₂負荷の高い港として特定された。

3. AIに対して社会はどのように変化するか

九州大学大学院システム情報科学府 情報理工学専攻修士1年
横山 健

昨今ChatGPTという、人間のように自然な会話ができるAIチャットサービスが、リリース後わずか2か月でユーザー数1億人を突破し、米Microsoftが開発元のOpenAIに対して100億ドルを投資することが報じられるなど、AI技術の発展に関心が高まっている。今回の発表では、AIは何ができるのかを説明することで、AIに対する理解を深めることを目的とする。発表を通じて、AI技術の発展に対して今後社会がどのように変化するかを考えるきっかけになればと思う。

4. 重力波観測によるアクシオンの探索

九州大学大学院理学府 物理学専攻修士1年
谷口 彰

アクシオンは未発見の粒子であり、いまだに正体不明の物質である暗黒物質の有力な候補である。さらに、この世界を統一的に記述する究極理論の候補である超弦理論も、アクシオンの存在を予言する。このような背景から、アクシオンを発見してその知見を得ることは、物理学における重要課題である。私は、重力波観測を用いてアクシオンを探索する研究を行ってきた。その結果、アクシオンについて新しい情報を得る方法を構築できたので、この方法を紹介する。

5. コンピュータに国語の授業を受けさせてみた

九州大学工学部電気情報工学科電子通信工学コース3年
工藤 雅人

昨年度の講義で学んだニューラルネットワークの応用例の一つであるWord2Vecを用いて、ニューラルネットワークの仕組みの理解、および自然言語の意味の数値的学習の原理の理解を目的とした研究を、昨年度に引き続きPythonを使って行いました。結果として単語を数値ベクトルとして表現し、単語同士の類似度を測ることができました。またその際生じるWord2Vecの持つ特性について、学習の仕組みから考察を行いました。

6. 徒然なるままに、243段を読破すれば・・・

九州大学医学部医学科2年
白石 陽生

昨年に引き続き、徒然草について研究した。今回は徒然草の全243段を、6つの評価項目（無常について言及した内容が含まれているか、など）に基づいて分析し、具体的に何をすれば兼好の理想の生き方を体現できるかという、前回分からなかったテーマについて考察した。無常について言及していない段でやたらと、「一つの道を極めた者は素晴らしい」という内容が頻出していることから、一つの道に専念し、余計な執着を生まないことが、苦しみを無くすことにつながるのではないかと考えられる。

7. 「福岡市中央区舞鶴」史

九州大学文学部人文学科2年
國崎 康平

今回、私は初めて対面での研修会に出席いたします。そこで、研修会が行われる福岡市中央区舞鶴という地にスポットを当て、その歴史をご紹介したいと思います。歴史学で主に扱われる文献だけでなく、発掘調査の成果や絵図なども用いて、福岡市中央区舞鶴という広くはない地域の変遷を通観します。歴史を扱う際、問われるのが時期区分と地域区分です。今回は特に、後者について考えるための一つの試みとして位置づけております。

研究支援奨学金 発表会

緑茶成分Xが老齢マウスの脳機能に与える影響の評価

九州大学大学院生物資源環境科学府 生命機能科学専攻食料化学工学教育2年

松井 優樹

現在の日本では、健康寿命と平均寿命が約10年乖離しており、高齢者を含めた国民の健康寿命の延伸は喫緊の課題である。健康は食事や運動、睡眠等の生活習慣により長期的に形成される。中でも、食事は健康に多大な影響を与えることが明らかとなっており、2015年に機能性表示食品制度が開始されるなど人々の食品の機能性への関心は高まりを見せている。食品は、医薬品と異なり、発症前から日常的に摂取できるため、健康の維持の一端を担う存在である。その中でも緑茶は、最も手軽に摂取できる食品の一種で、近年、緑茶の脂質蓄積抑制作用や抗がん作用など多彩な生理作用が報告されており、緑茶成分への注目が高まっている。そこで本研究では、緑茶に含まれる成分が認知機能に与える影響について評価を行った。

【方法】

66週齢雄性C57BL/6Jマウスに緑茶成分X10mg/kg b.w.を2週間経口投与し、新規物体認識試験および臓器重量の測定を行った。脳を回収し、海馬における脳機能関連タンパク質の発現をウエスタンブロット法にて評価した。また、腸上皮様に分化させたCaco2細胞とヒト神経芽細胞腫SH-SY5Yを共培養し、Caco2細胞管腔側から緑茶成分X10 μ Mを24時間おきに3回添加した。その後、基底膜側で培養したSH-SY5Y細胞を回収し、ウエスタンブロット法にて、神経可塑性関連タンパク質の発現を評価した。

また、6週齢雄性C57BL/6Jマウスに緑茶成分X10mg/kg b.w.を単回投与し、2、4、6時間後に血漿を回収し、miRNAの発現を評価した。

【結果・考察】

新奇物体認識試験において、緑茶成分Xの経口投与により認知機能の向上が認められた。神経可塑性関連タンパク質発現を検討したところ、緑茶成分Xを投与したマウスの海馬において、神経可塑性向上の指標であるCREBのリン酸化、BDNF発現量の増加が認められた。また、臓器重量を測定したところ、脳重量のみが増加していた。そこで、神経新生関連タンパク質の発現を検討した結果、SOX2、DCX、NeuNの発現上昇が認められた。

続いて、緑茶成分Xの脳機能調節作用の可能性を検討するため、ヒト神経芽細胞腫SH-SY5Yに緑茶成分Xを直接作用させたが、CREBのリン酸化レベルに変動は認められなかった。そこで、緑茶成分Xの腸管上皮細胞を介した神経細胞に対する影響を検討した。その結果、緑茶成分Xを添加したCaco2細胞の基底膜側のSH-SY5Y細胞のCREBのリン酸化レベルが増加した。以上より、緑茶成分Xは、腸上皮細胞を介して脳機能を活性化する可能性が示された。また、若齢マウスを用いた研究の結果、緑茶成分Xは、miRNAaの発現を減少させることが示された。

九州地区前期第2回研修会 令和5年7月8日

1. SERSセンサでガスを観る

九州大学システム情報科学府修士1年

山田 健太

私はSERSセンサというものについて研究を行っています。このセンサは物質に光を当てた時に発生するラマン散乱光を利用しており、微量の分子でも検知することが可能です。今回は、SERSセンサを用いてガスの分布を二次元的に可視化する実験を行ったので、その成果について報告します。この技術は、将来的には皮膚から出るガスを可視化して疾患などを調べることや環境モニタリングなどに応用できると考えています。

2. メタボは手術で治す時代？

広島大学医学部医学科5年

田之上 絢香

WHOは2016年に世界中で19億人が太り気味であり、このうち6.5億人が肥満であると報告しているが、まさに“肥満”は近代世界の疫病である。肥満症治療の中心は、食事制限や運動制限などの内科的治療であるが、1960年代から米国を中心に外科治療が行われており、近年日本でも手術件数が増加している。今回の発表では、まず肥満や肥満症の定義を確認し、その後、外科治療の適応基準や手術の種類、手術の効果について説明する。

3. 迫りくる人手不足に早めの処方箋 一看護師の働く環境デザイン・睡眠編一

九州大学医学部保健学科看護学専攻3年

新井 花奈

世間でもよく問題提起される現役世代の減少。それは医療業界でも深刻な人手不足を引き起こすと思われるが、人の命に関わる医療は特に早めの対策が必要である。解決のカギは、職場の環境と業務の方法の改善と考え、今回はその中でも、夜勤看護師の睡眠について注目した。実習中に見た看護師さんの休憩室や、仮眠室の様子に「こんなものを加えたら良いのではないか」と発想が浮かんだのをきっかけに、今回、人の生理機能に基づいた、理想の仮眠室を考えてみた。

4. 法医学の担う役割とその展望

長崎大学医学部医学科3年

林 宏輝

医師の仕事は何か、と聞かれると想像しやすいのは病を抱えている患者に対する治療だろう。そうした「生」と向き合う医療行為と対照的に、「死」に向き合う医療が存在する。それが法医学である。病死、事故死など人の死には様々な要因がある。そうした要因を決定づける上で法医学は重要な役割を担っている。今回は、こうした法医学の意義と、私自身が今後取り組んでいく研究について発表していく。

5. 先生が足りない？

佐賀大学教育学部小中連携教育コース 中等教育主免社会科専攻3年
川邊 遊

教員という職業を考え続ける中で、教員不足が社会問題に発展していると感じたことから、人を育てる基盤である学校の危機的状況を教員不足の側面から伝えることを目的に、現場の実態をデータや資料から分析し、問題の背景と影響について発表します。教師はブラックだと言われますが、既に教師の献身性では支えられないほど状況は悪化しています。教師の働く環境を早く変えなければという意識を強く持っていただける機会になればと思います。

研究支援奨学金 発表会

ダイオキシンの次世代毒性の機構とその回復法に関する研究

九州大学薬学部創薬科学専攻2年
藤本 茉奈

私は、環境汚染物質であるダイオキシンが次世代に及ぼす毒性影響と、ビタミン様物質である α -リポ酸によってそれらの毒性影響を回復する方法について調べています。この毒性影響の発現機構や、回復機構を詳しく解明し、将来的には次世代が安心して暮らせるための健康指針をつくることを目的としています。実験には、ラットを用いており、ラットを交配させ、妊娠ラットに比較的低用量のダイオキシンを投与後、サンプルの採取を行っています。採取したサンプルは、処理後に遺伝子発現量を調べたり、UPLC-TOF-MSやELISA等を用いて、標的分子の濃度を調べたりして解析しています。本年度の研究では、主に、1) 成長後の性未成熟に関連が示唆される胎児期に発現変動する遺伝子の同定、2) 胎盤におけるリポ酸輸送への影響、3) 母体におけるビタミンB12レベルへの影響、といった3つの結果が出ています。まず、1) について、全ゲノムメチル化状態の網羅的解析のデータから、遺伝子を絞り込み、サンプルを解析したところ、エネルギー通貨であるATPの産生に重要なニコチン酸アミドの代謝に関する遺伝子のメチル化状態が変動していることが示唆されました。2) について、ビタミンが胎児に移行していない可能性を検討するために、それらを母親から胎児に運ぶトランスポーターについて検討したところ、ダイオキシン投与によって、有意な変動が見られました。3) について、血清サンプルを用いて、母親のビタミンレベルを調べたところ、ダイオキシンによる影響は見られませんでした。

これらの結果から、エネルギーに重要なNADの生合成が停滞している可能性があること、胎盤においてトランスポーター発現量が減少していることで、ビタミンが胎児に十分移行していない可能性があることがわかりました。現在は、これらをもとに、さらに検討を進めています。

関西地区研修会 令和5年9月2日

1. 南極の岩石が記録する超大陸の形成過程

京都大学 理学部 地球惑星科学専攻 岩石学講座4年
権藤 洸人

【目的】南極で採取された岩石を顕微鏡下で観察し、その岩石が地下をどのように移動したかを探る。【方法】アルミノシリケートと呼ばれる『多形鉱物』の種類を割り出し、組織観察からその形成時期の前後関係を明らかにする。【結果】温度-圧力図上で表すと、岩石が『反時計回りの経路』を大まかに記録していることが分かった。【考察】先行論文で指摘されているような、大陸衝突に起因する衝上断層の下盤側に位置する岩石と考えられる。

2. シェル構造と剛体折り紙

京都大学工学部建築科4年
徳村 夏輝

今回、シェル構造と剛体折り紙について発表します。シェル構造とは貝殻のような曲面を持った建築構造のことですが、私の研究室ではこのような幾何学的な特徴を持つ構造を対象に研究しており、前期ではシェル構造およびそれに関わる構造の特徴・理論を学びました。また、私の研究テーマは「同一パネル（剛体折り紙によって出来上がった一つの単位）の周期構造を持つ剛体折り紙（仮題）」です。この研究テーマの概論について実用例などもまじえて発表いたします。

3. 1秒の精密性を向上させる物理学者の戦い

大阪大学理学部物理学科4年
山田 和輝

時間は現代社会の重要な要素の1つであり、1秒の定義には物理学者の研究が貢献している。この発表では1秒の定義とその測定方法に焦点を当て、原子時計の登場が時間の正確性を向上させた成果はGPSや通信など身近なところで活かされていることを紹介する。また、より精密な1秒を定義する物理学者の研究は現在でも続けられている。このような物理学の進歩が私たちの生活に与える影響を通して、正確な時間の定義の重要性を考える機会を提供する。

4. 企業分析の教育実践について

神戸大学経営学部経営学科3年
今井 琴海

前期に講義型ではなく演習型の講義を初めて受講しました。「企業分析の教育実践」という講義の内容は財務諸表を用いた企業分析の手法について、小中学生を対象にどのように教育するかを構想し、それを実施するというものでした。外部講師によるレクチャーや経済学部の先生も交えた中間報告、そして近隣の中学校での模擬授業を経て、最終目標である神戸市での小中学生を対象とした金融教育イベント開催までの内容について説明します。

5. 薬の体内動態を制御する

京都大学薬学部3年
宮崎 結生

頭痛がすれば鎮痛剤を飲み、筋肉痛になれば湿布剤を貼る。このように薬は生活上欠かせないが、では、薬は体内に入ってから排泄されるまで、どのような運命を辿っているのだろうか。この薬の体内動態を理解し制御することで、より良い効果、より少ない副作用の薬を作ろうというのが薬の体内動態をコントロールする技術、すなわち、Drug Delivery System (DDS)技術である。今回は薬の体内動態に加え、DDSについてもお話しする。

6. 視覚障害児への早期介入

大阪公立大学医学部医学科2年
牛島 陸斗

私は、病院実習を通して小児科への関心が高まった。小児科ではさまざまな病状の小児がいたが、特に視覚障害児が印象的だった。視覚障害児は世界では推定19.1万人、そのうち4万人は失明者とも言われている。しかしながら、早期スクリーニングによる発見やケアを行うことができれば、視覚機能のみならず、視覚障害に伴う心理的障害の改善にもつながると報告されており、視覚障害児への早期介入は非常に重要である。今回、この視覚障害児の現状と課題に着目して考察を加えながら発表する。

7. 様々な事象を経済学の観点から考える

大阪大学法学部国際公共政策学科2年
郭 薔

私たちが抱く「なぜ？」という疑問は、経済学を用いると解決できることがよくある。そこで、今回は具体的な3つの事象（結婚持参金、最低賃金、営業自粛）についてそれぞれ経済学的な観点から分析し、なぜそのような事象が起こるのかという疑問に対処する。結婚持参金と最低賃金については需要と供給の関係の点から分析し、営業自粛についてはそれを促すと考えられる政策を挙げたうえで、どの政策がもっとも営業自粛の要因となるものか、仮説を用いて検討する。

8. 薬剤耐性菌の脅威とその対策

大阪大学薬学部薬学科2年
堺 梨紗

大学の研究室見学を通して、薬剤耐性（AMR）について興味を持ち、発表テーマとして選んだ。これまで、私たちが感染症の治療に使用してきた「抗菌薬」が効かない細菌が、近年増加している。この薬剤耐性は、世界規模で問題となっており、2050年には薬剤耐性菌による死亡者数が、癌による死亡者数を超えると予測されている。そこで今回は、細菌やウイルスが薬剤耐性化する仕組み、薬剤耐性菌の増加を抑えるために私たちができる対策について紹介していく。

9. 動吸振器の設計指針と都市開発における実用例

大阪大学工学部応用理工学科2年
東 開土

2年前期に機械力学という科目を履修し、さまざまな振動について学んだ。その中で、振動を抑制する技術の一つである「動吸振器」に興味を抱いた。動吸振器は、機械の振動を逆手に取り、振動を抑制する装置である。振動を抑制したい対象に錘をつけて意図的に揺らすことで、対象の揺れを抑えることができる。この原理や、実験の様子、設計指針を解説する。更に、都市開発における構造物への応用事例についても紹介する。

10. メタバースの将来性

大阪大学基礎工学部情報科学科1年
末吉 温

2020年から新型コロナウイルスが世界中で大流行して外出機会が少なくなり、その影響からか、メタバースという技術が注目を浴びるようになった。メタバースとは自分の代わりとなるアバター（化身）を操作し、コンピュータ中に構築された3次元の仮想空間で他者と交流していく、その技術である。今回の発表ではこのメタバースの利点、欠点を考えるとともに、どのようにして仮想空間が作られるのかについて説明し、加えて、メタバースの将来性についても考察していく。

11. 遺伝子の研究でショウジョウバエを用いる利点

京都大学薬学部1年
千綿 美慧

私が前期に受けた授業の中で最も興味を引かれたものは「がんの分子機構の最先端～ショウジョウバエを用いた基礎研究」という授業でした。この授業ではショウジョウバエが遺伝子の研究に適している理由や、遺伝学における考え方や、がんを抑制する遺伝子をどのようにして見つけるのかといったことを教わりました。今回の発表では、この中でもショウジョウバエが遺伝子の研究に適している理由について発表します。

12. ヒトパピロウイルス（HPV）ワクチン ―その歴史と未来―

大阪大学薬学部薬学科1年
長尾 野之香

子宮頸がん予防のためのワクチンであるヒトパピロウイルス（HPV）ワクチンは国内では2年前に接種推奨が再開され、キャッチアップ接種も行われている。世界保健機関による接種推奨があるにも関わらず、日本における接種率は他の先進国に比べて著しく低いのが現状である。その理由について、私自身がワクチン接種の対象であることもあってHPVワクチンについて勉強した。その結果を接種推奨再開の是非や男性へのワクチン接種提供の点から発表したい。

13. 経済的格差の原因について

大阪大学経済学部経済経営学科1年
満永 瑛稀

経済的格差という問題は家庭間、地域間、国家間のいずれにおいても見られ、現在でも根深く残っています。中でも国家間における経済的格差についてはGDPの差を主な指標として観測することができ、そのため、GDPの特徴から経済的格差の原因となっている要素を把握することができます。今回の発表では、それらの要素を整理し、中でも特に「制度」の差異がもたらす格差について、朝鮮半島で存在している経済的格差を例に説明していきます。

14. イタリア留学の報告

京都大学大学院文学研究科文献文化学専攻イタリア語学イタリア文学専修修士1年
小河 義典

この度、ポッコロニ大学への聴講と現地での資料収集、並びに語学力の向上を目的として、イタリア・ミラノにて約8ヶ月間の留学を行いました。特に研究のための資料収集に関しては、私が研究対象とする台本作家ルイーダ・イッリカについて、まだ日本に紹介されていない情報を得ることができました。今回の発表ではこれらの情報を中心に、8ヶ月間の留学生活について皆さまにご報告いたします。

九州地区後期第1回研修会 令和5年10月7日

1. 警固断層地震、どのくらいの住宅被害になるの？

九州大学工学部土木工学専攻2年
小山田 莉緒

警固断層地震とは、玄界灘から福岡市中心部を経て筑紫野市に至る警固断層帯によって発生する地震である。福岡市などで最大震度7と大きな揺れが予想されており、住宅被害は甚大なものになるだろう。そこで今回は、住宅全壊半壊棟数を推計し、住宅被害がどのくらいまで及ぶのか検証する。この検証は、仮設住宅の確保を事前に進めておく上で重要であるとともに、賃貸空き家を借上げて利用する借上型仮設住宅として利用できる可能性についても検討する。

2. 睡眠時無呼吸症候群患者の苦しみ

九州大学医学部医学科5年
松崎 広太

肥満の方に見られる特殊な病気というイメージが強い睡眠時無呼吸症候群（Sleep Apnea Syndrome, SAS）ですが、国内の推定患者数は900万人以上とされており、実はもっと身近な病気です。SASは睡眠の質の低下を引き起こすだけでなく、認知症や糖尿病など様々な疾患と関連する複雑な病態を持っています。今回はSASのメカニズムだけでなく、実際のSAS患者である祖父を例にして、患者・家族側の苦勞といったところまでお伝えします。

3. 材料科での学びと結晶粒微細化強化について

熊本大学工学部材料応用化学科4年
榎木野 介子

私は現在、材料工学を専攻しています。皆さんは材料と聞くと何を思い浮かべますか？ 機械科で力学やロボット工学を学んでいる人は想像しやすいと思います。しかし、材料科で何を学んでいるのか、想像しにくく、実際に専攻を答えても、「材料？」といった感じで首を傾げられる場面が多々あります。そこで、今回は、材料工学で学んでいる内容について簡単に紹介し、中でも私の卒業研究テーマである結晶粒微細化強化について発表いたします。

4. 半月板断裂治療中に得られた疑問とその回答

九州大学薬学部創薬科学科1年
今井 皓星

私は6月11日に右膝外側半月板断裂という怪我を負い、手術を受けて入院していました。その治療中にCOVID-19に感染した人の多くに肝機能の低下が見られるという事象を知り、疑問に思いました。そこで、実際に自分の血液検査の結果などを用いながらその事象について考え、加えて、執刀医や看護師から聞いた話を参考にしながら、現段階で私自身が持っている知識をもとにして自分なりに疑問への回答を得ましたので発表します。

5. ロケット開発の歴史とこれから

九州大学工学部Ⅲ群1年
工藤 健太

私自身、大学で「宇宙開発に向けた学習」を行っていく上で、その見通し立てに活用出来るのではないかと理由から、今回、ロケット開発の歴史や、将来のロケット開発に向けて要求されることについて考察してみた。方法としては文献やネットから得られた資料を元にしてロケット開発の歴史を調べた結果、今後の課題として、ロケット開発には、ロケット打ち上げの低コスト化および宇宙の交通規制による安全性の確保が必要になるという考察を加えた。

九州地区後期第2回研修会 令和5年11月11日

1. 地震観測の方法について

九州大学大学院理学府地球惑星科学専攻2年
高山 竜之介

私の所属している「観測地震・火山学」研究室では、学生自らが地震計などの計測器を設置して観測し、得られた観測データの解析を行っている。今回は、地震はどのような方法で観測されるのか、その地震観測法について、まずは地震計を設置する場所といった基本的なところから始め、加えて、地震計の仕組みや得られたデータの波形分析法などについて、実際の観測現場の写真を用いながら、地震発生メカニズム研究の一端として紹介する。

九州地区後期第2回研修会 令和5年11月11日

1. 地震観測の方法について

九州大学大学院理学府地球惑星科学専攻2年
高山 竜之介

私の所属している「観測地震・火山学」研究室では、学生自らが地震計などの計測器を設置して観測し、得られた観測データの解析を行っている。今回は、地震はどのような方法で観測されるのか、その地震観測法について、まずは地震計を設置する場所といった基本的なところから始め、加えて、地震計の仕組みや得られたデータの波形分析法などについて、実際の観測現場の写真を用いながら、地震発生メカニズム研究の一端として紹介する。

2. 情報社会におけるプライバシー保護について

九州大学大学院システム情報科学府情報理工学専攻1年
藤本 隆晟

皆さんはスマホ等を利用する際、個人情報保護が徹底できていると思いますか？実際はほとんどの方が完璧にはできていないと思います。AI技術の発展やデータこそが重要視される現代において、「プライバシー」という言葉をよく目にします。私の研究テーマは「差分プライバシー」です。プライバシーの差分？プライバシー保護はセキュリティと同じ？これらの疑問やこれからの情報社会におけるプライバシー保護について皆さんがよく利用する身近なものを例に簡単に紹介します。

3. 炭素連結型糖アナログの合成研究

九州大学大学院薬学府創薬科学専攻1年
中橋 凜太郎

私が所属している研究室では、天然に存在する生物活性分子に対し小さな構造変換を施した“擬天然物”の合成研究に取り組んでいる。有機化学および生物学の知見を生かし、“擬天然物”を設計および合成することで、これまでよりも高い活性を持つ化合物、新しい機能を付与した化合物の創出に挑戦している。本研修会では、糖を基盤とした擬天然物の一つである「炭素連結型糖アナログ」の合成研究について紹介する。

4. 解剖実習ってどういうもの？

佐賀大学医学部医学科3年
福井 優子

医学部のカリキュラムとして、実際にご遺体を解剖させていただく「解剖実習」という実習があります。私は医学部に入学して以来、医学部生や医師以外の方々から、解剖実習について尋ねられる経験が多くありました。そこで、あくまで佐賀大学においてのお話にはなりますが、解剖実習についてできるだけ詳しく発表してみたいと考えました。今回は身の回りの方々からよく尋ねられることを中心に、実習の期間や目的、ご献体についてまとめてみました。

5. 小型風車前進・後退翼の形状および性能に関する予備的検討

京都大学工学部機械システム学コース2回
才田 隼輔

小型風車は設置できる場所が多いため、都市部や住宅地域での再生可能エネルギーの利用拡大に貢献することが期待されている。本研究では3次元CADを用いてより高性能な小型風車を設計し、3Dプリンタにより印刷したものをモデルとして風洞実験を行い、その性能を評価した。結果は、従来の風車より10%ほど効率が上がり、この効率の変化は、おそらくブレードを前進・後退させることで、ブレードの内側に巻き込む流れが生じたためだと考えられる。

6. アントレプレナーシップとは何か

九州大学工学部I群2年
吉田 遼太郎

私は夏休み中にEntrepreneurship Bootcampというプログラムに参加し、日本での事前研修ののち、10日間ほどボストン研修に行きました。ボストンでは、起業家、投資家による講義の受講や、現地の学生との交流を通してアントレプレナーシップについて学びました。また、それと並行して、チームでビジネスプランとプロトタイプを作成して彼らの前でプレゼンテーションを行いました。今回は、現地での体験や、そこから学んだことについて発表します。

7. 臓器移植の現状とこれから

佐賀大学医学部医学科1年
中川原 歩乃佳

2010年の臓器移植法改正により、日本の脳死における臓器移植数は大幅に増加しました。しかし、臓器移植を希望している人のうち1年間で臓器移植を受けることができる人はわずか3%であることが現状です。そこで私は文献などを用いて臓器移植数が少ない原因について考察を行なった結果、意思表示を行っている人数が少ないことや医療従事者側から患者に対する情報提供が不十分であることが分かりました。今回はこの原因とそれに対する解決策について発表いたします。

8. 観光都市としてのベネチアと京都の比較

九州大学共創学部共創学科1年
山野 莉那

今年7月にベネチアが「危機遺産」リストへの登録を勧告されましたが、結局、その登録は9月に見送られました。日本国内でもベネチアと同じようにオーバーツーリズム（観光公害）の影響が問題となっているのが京都です。京都が「危機遺産」に登録される可能性がどれほど高くなっているか、観光客数やオーバーツーリズムの具体例など挙げ、いくつかの側面からベネチアと比較し、さらには観光都市としての京都の保全に関して考察しましたので発表します。

令和5年12月15日



瑞藤会総会のご案内

師走の候、瑞藤会の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、瑞藤会総会を数年ぶりに下記のとおり、開催することになりましたので、
ご案内いたします。

当日は黒田奨学会・令和5年度卒業式祝宴と併せて行いますが、皆様には
奮ってご参加頂きますよう、お願いいたします。

なお、黒田家第16代御当主・黒田長高様ご夫妻も参加される予定です。

公益財団法人黒田奨学会
理事長 伊達 健太郎

記

日 時：令和6年3月20日（祝） 午後5時半より

会 場：ホテルオークラ福岡 平安の間

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-2

TEL 092-262-1111

会 費：10,000円（令和4年、5年の卒業生は半額）

（会費は下記振込み先に事前振込みをお願いします。）

振込先：福岡中央銀行 本店営業部 店番号 001

普通 口座番号 1218800

出欠の御連絡は、令和6年2月28日（水）までに下記事務局宛、メールまたは
電話、ファックスにてお願いします。

公益財団法人黒田奨学会事務局

〒812-0073 福岡市中央区舞鶴2-2-11

富士ビル赤坂7F

TEL 092-712-0597 Fax 092-714-7304

（月・水・金 10:00-17:00）

E-mail:office@kuroda-s.or.jp